暗殺教室～28人の暗殺者と1人の戦争屋～

BIGBOSS0514

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０?年３月のある日、突如として月の７割が吹き飛んだ。その数時間後、異形な姿をした謎の生物が日本にやってきた。マッハ２０で空を飛び、月の７割を破壊して常時三日月の状態にしたと言う危険な生物は「来年３月までに自分を殺せなければ地球も破壊する」ことを宣言したうえ、「椚ヶ丘中学校３年Ｅ組」の担任教師となることを日本政府に希望した。超生物の要求を呑んだ政府は防衛省の人間を送り込むとともに、アメリカのツテを介して、世界最強の傭兵集団〝ネメシス（凶星）〟にも協力を要請した。その数日後、日本に一人の少年が降り立ったー。

皆さん初めまして。いろんな人の暗殺教室の二次読んでたら書きたくなりました。初投稿なのでどうぞお手柔らかに・・・。なるべく原作寄りにしようと〝思ってます〟。

目次

人物・設定紹介
主人公紹介 ―― 1
その他一期登場人物・設定紹介 ―― 8
プロローグ
0．5話　転校の時間 ―― 11
0．8話　引っ越しの時間 ―― 17
一学期
1話　始まりの時間 ―― 22
2話　慣れ合いの時間 ―― 30
3話　先生の時間 ―― 37
4話　訓練の時間 ―― 46
5話　信頼の時間 ―― 52
6話　カルマの時間 ―― 60
7話　大人の時間 ―― 70
8話　再開の時間 ―― 83
9話　奥田の時間 ―― 91
10話　集会の時間 ―― 106
11話　テストの時間 ―― 118
12話　結果の時間 ―― 135

人物・設定紹介

主人公紹介

赤城　隼人（あかぎ　はやと）

誕生日　５月１４日（１５歳）

身長１７０ｃｍ　体重５９ｋｇ

血液型　Ａ型

好きな教科　社会

嫌いな教科　理系科目全般

趣味　珈琲・紅茶淹れ、銃の手入れ、サイクリング、ドラム、ゲーム、食べ歩き等々

宝物　Ｈ＆Ｋ４１６Ｄ　隼人カスタム

個別能力値（最高６段階）

体力　３

機動力　６

近接暗殺　６

遠距離暗殺　5

学力　4

固有スキル　投擲ナイフ　6

E組の皆からの隼人の評価

カルマ　弄れるけどあまり隙がないかな～

磯貝　頼りになる奴だよ！

岡島　怒らすと怖いぞ～

岡野　なんか大人びてるよね～

奥田　親切な人です！

片岡　何でもできそうだよね～

茅野　何もかも見透かされてそう

神崎　普段は明るいんですけど・・・たまにもの悲しそうな表情をするんですよね・・・

木村　慌ててるところあまり見ないよな～

倉橋　凄く女子に気を遣ってくれるんだよ～！

渚　悪ノリしてくるのがねー・・・

菅谷　たまに無茶ぶりで何か作らすのやめてほしいんだけど・・・

杉野　破天荒なところあるよな～

竹林　君もオタクかい？

千葉　あいつ射撃上手いよな～

寺坂　俺と同類だな

中村　なかなか弄りネタが出てこないんだよね～

狭間　死のオーラをまとってるような感じがするわ・・・

原　食べ物の美味しい店たくさん知ってるの！

速水　射撃も身のこなしも上手い・・・教えてもらおうかしら・・・

不破　これが世にいうチートだｙグ八ッ・・(隼人：メタ発言はやめようか（^^））

前原　クラスの女子と親しい・・・敵だな・・・

三村　ギター教えてほしいな～

村松　やべぇ奴だよな～（語彙力）

矢田　カッコイイ！

吉田　やべぇ奴だよ！（語彙力）

律　みんなの前では明るいけど、一人の時は思い悩んだような表情をしていますね

イトナ　苦手なタイプだ

隼人から見たE組の皆

カルマ　あいつに隙見せたら終わりだな・・・

磯貝　頼りになる奴

岡島　変態

岡野　身のこなしがいいよな～

奥田　化学か～教えてもらおっかな・・・

片岡　真面目だよな～

茅野　気のせいかな・・・たまに見える黒いオーラは・・・？

神崎　大和撫子の一言に尽きる

木村　〝まさよし〟じゃねえのか・・・

倉橋　かわいいよね～

渚　たまに見せる殺気は何なのだろう・・・

菅谷　暗殺道具作ってくれるいい奴

杉野　野球ばっかしてるよな～

竹林　ＭＧＳのオタコン思い出したわ

千葉　射撃が上手い、いいセンスだ

寺坂　一緒にすんなよ！

中村　こいつにも隙見せたら終わりだな・・・

狭間　雰囲気怖えよ

原　よく食べてらっしゃる・・・

速水　射撃と身のこなしに秀でている、いいセンスだ

不破　メタいぞ貴様

前原　なんで俺目の敵にされてんだろ・・・

三村　校舎裏でエアギターしてるやつ（三村:何で知ってんだよ！）

村松　ラーメンがまずい（村松：んだとアア!?）

矢田　中学生で既に色気があるようなないような・・・

吉田　バイクで気が合うな

律　人工知能ってここまで進化するもんだな～

イトナ　めんどくせぇ奴だな・・・

烏間先生から見た隼人の評価
流石、伝説の男の下にいただけはある。戦闘において不足はほとんどない。体力をつければ相当な戦力になるだろう。計画性がないのが玉に瑕だな・・・。

殺せんせーから見た隼人の評価
自身の戦闘力に驕らず、周りを常に見て、気遣うことのできる生徒です。まぁ、欠点があるとすれば理系科目ですかねぇ・・・ヌルフフフフ

ビッチ先生から見た隼人の評価
なんか生意気だけど・・・たまに彼に気づかされるときってあるのよね・・・

隼人から見た教師陣

烏間先生
実践戦闘でのいい練習相手。たまに相談に乗ってくれるイイ先生。

殺せんせー
下世話だけど・・・なんか憎めないんだよなぁ・・・

ビッチ先生
ビッチだけど・・・何かしらの悩みはあるんだな・・・

概要

傭兵集団〝ネメシス〟の一員で、最年少メンバー。日本人。

幼くして両親を亡くしたところを祖父母に引き取られ、幼児期を日本で過ごす。しかし、6歳の時に祖父母も病に倒れたため、親戚でありながらネメシスのリーダーでもあった透に引き取られる。その後、透の下で戦闘スキルを身につけ、世界中の戦場を渡り歩いた。

母国語の日本語と部隊の公用語である英語の両方を話すことができる。又、前述の通り、戦闘スキルはクラスでもトップクラスである。ただ、理数系に弱いせいで感覚に頼ってしまいがちなところもある。

性格が優しいのは祖父母譲り。悪ノリすることもあるが、クラスにすぐに溶け込んでいくことになる。

その他一期登場人物・設定紹介

一期人物紹介

赤城　透（あかぎ　とおる）

外見イメージ：ＡＣＥ　ＳＴＲＩＫＥＲＳの隻眼の中年　ＣＶ：ゴルゴ１３

概要

隼人の叔父であり、傭兵集団〝ネメシス〟のリーダー。日本人。

あらゆる銃器・兵器の取り扱いに長けている上に、世界中の武術を極めている。その強さはたった１人で米軍特殊部隊員２００人、一般人に置き換えるなら１００００人に匹敵するとまで言われており、〝冥王〟という渾名で恐れられている。また、日本語の他に英語、ロシア語、フランス語、ドイツ語など計８か国語をマスターしている。

ミッション成功率１００％に加え、自身や身内に関わる案件でない限り一切の干渉をしてこないことから世界各国首脳からの信頼も厚い。

普段から表情は険しく、身内にも普段から厳しく接する一方で、思いやっている一面もある。

なお、彼の素性は透との親戚関係以外の一切が不明である。

ミレーナ＝ホウジョウ

外見イメージ：セブンナイツのコルト　ＣＶ：西住しほ

概要

傭兵集団〝ネメシス〟の一員。日系アメリカ人。透の副官で、ミッション中以外は常に彼のそばにいる。

ライバル傭兵集団〝群狼〟のリーダーであるクレイグ＝ホウジョウの妹である。ＮａｖｙＳＥＡＬｓチーム６出身で、米軍初の女性特殊部隊員としても知られている。潜入及び格闘を得意としている。

透がミッションでいない間に隼人に戦闘のいろはを教えた師匠であり、隼人が戦場デビューしてからは共にミッションに赴く戦友である。

千賀　正信（せんが　まさのぶ）
外見イメージ：アニメ版暗殺教室の２期２２話に登場する強力な自衛官　ＣＶ：外見イメージと同様
概要
傭兵集団〝ネメシス〟の一員。日本人。
自衛隊上がりで、烏間先生や鷹岡先生とは第一空挺団で同期だった。自衛隊に入る前は東大医学部出身で、医師免許も持っている。救護兵としてチームに在籍している。ＰＫＯに自衛隊として参加した際、孤児だったイリーナと会ったことがある。

用語紹介

ネメシス

概要
世界最強と名高い傭兵集団。メンバーは１４人と少ないものの、人間離れした戦闘能力に加えて、潜入・諜報・サイバー・爆薬・機械工学など様々な分野において世界トップクラスの技術を持つ兵士が揃っている。彼らが本気を出せばアメリカをも滅ぼすことができるとされ、現在は国連安保理の常任理事国間の秘密協定によって直轄部隊として活動している。

設定紹介

・基本的にはアニメ版に則って書いていこうと思います。

・隼人はなるべく出しゃばらないようにします。

・恋愛要素複数パターンで作ろうと考えてます。

・書きながら考えてるので、原作変更点は各回で書いていこうと思います。

プロローグ
０．５話　転校の時間

（２０ＸＸ年の３月の某日、月が突如として三日月へと変わった日の翌日だ。
俺は中東の数多の銃声鳴り響くとある集落にいた。
なんでそんな戦場と化してるところにいるかって？そりゃあ仕事に決まってるだろ？
もっとも、人様に誇れるような仕事じゃないがな。）

「一人でぼやいている暇があったら一人ぐらい倒したら？」

となりでＳＣＡＲ―Ｌをフルオートでぶっ放している、全身黒のＢＤＵに身を包んだ女、ミレーナが俺に叫ぶ。

「ほざけ、俺の方がキル数多いわ」

彼女と同じ黒のＢＤＵに身を包んでいるが、手に持っているのはＨ＆ａｍｐ；ｋ４１６Ｄである俺は女にそう叫び返した。

そう、俺の職業は―戦争屋だ。

ここはとある宗教の過激派集団２００人程が占拠していた集落だ。
現地政府は他の宗派からの非難も鑑みて、軍による鎮圧をためらっていた。
困り果てた政府から排除の要請を受けた国連安保理はこれを承諾、俺達を送り込んだというわけだ。

戦闘は1時間で終わった。
銃声こそ止んだものの、未だに硝煙漂う集落はテロリストの死骸で埋め尽くされていた。
目の前の建物の曲がり角から一人の男が姿を現した。
「雑魚一匹倒すのに何秒かかってる、隼人。それと一匹殺すのに何発弾を使っている？」
男は出てくるなり俺の戦闘にダメ出しをしてきた。
俺の前で口を開けばダメ出ししてくる彼に正直イラッと来ているが、
「・・・悪かったよ」
俺はそう彼に言った、いや、言わざるを得なかった。
それ以外の返事をした日には俺の命はないだろう。
なんてったって、目の前にいる彼こそ俺が所属する部隊のリーダーであり、世界最強の兵士と言われていて、そして何より、俺の叔父なのだからー。
後処理を現地政府に任せた俺達は、米軍の用意したヘリでインド洋上の米空母に向かった。
この後依頼は特に入ってないから、俺はこの艦がグアムに寄港するまで船旅を楽しむことにした。
すっかりと日が落ちた頃、飛行甲板に腰を下ろしていた俺は、先日突如として欠けた月を眺めていた。

部隊内では生物が吹っ飛ばしたと噂になっているが・・・まぁそんな生物いるわけがない、うん。

おっと、電話がかかってきたようだ。

「もしもし？」

「おう、元気か？隼人」

「なんだ、お前か。なんか用？」

電話をかけてきたのは部隊のメンバーの一人、千賀だった。

「さっき国連から依頼が届いていたぞ、今回の依頼はお前だけに頼みたいそうだ」

「・・・なんで俺なんだ？あんたとかボスとかの方がいいんじゃねぇの？」

「まぁそう言うなって、詳細は現地で伝えるから。じゃあな」

「おい!?チッ、切りやがった・・・」

電話を切られたことに毒づいたと同時にボスが俺のもとにやってきた。

「あ、ボス。なんか依頼が入って・・・グハッ!?」

立ち上がって電話のことを伝えようとして、いきなりボスに投げられた俺は訳も分からないまま意識を手放した。

そして目を覚ました時には、俺は発艦態勢に入った艦載機のシート

に縛り付けられており、俺の悲鳴もむなしく夜空へと打ち出されていたのだったー。

数時間後、俺の乗った機体は何回かの空中給油を経て、在日米軍が駐留する横田基地の滑走路に着陸した。

フラフラになりながら降り立った俺を出迎えたのは、千賀だった。

「空の旅は楽しめたｋ「殺す」まぁそんな怒るなって」

不機嫌な俺に対して千賀は明るく振舞った。

それが無性に腹立つのだが。

基地の客間に案内された俺は、見知らぬ日本人と対面させられた。

「赤城隼人君だね、俺は防衛省の烏間だ」

（誰だよ・・・防衛省にそんな知り合いいたかな・・・）

「今回の大元の依頼主、日本政府から送られた担当者だ。まぁ、俺はこいつとは知り合いだがな」

隣にいる千賀が俺に耳打ちしてきた。

千賀とは自衛隊で同期だったという烏間さんは俺に、月を破壊したという超生物を日本のとある中学校のあるクラスと協力して暗殺してほしいと言ってきた。

率直に言うと、馬鹿げてる話だ。

月を破壊する生物なんているというのがそもそものツッコミどころなのだが、なぜ民間人である中学生を巻き込むのかというのも、俺にはまったく理解できなかった。
どうやらその超生物は昨日、防衛省を訪れ、
「来年には地球を吹き飛ばすが、椚ヶ丘中学校のＥ組の担任なら引き受ける」
と言ってきたらしい。

・・・いよいよ分からなくなってきた。

言語が通じるというのにも驚きだが、学校やクラスまで指定した上で教師をやるというのだから、もう笑いしか出てこない。
「確かに可笑しな話だが、本当なんだ。報酬は１００億、引き受けてくれるか？」

烏間さんは至って大真面目な顔で言ってくるのだから、本当のことなのだろう。
しかし、マッハ２０で動く・言語が通じる・実弾は効かず、特殊な素材でできた武器を使用するｅｔｃ・・・ といったこと以外何も分かっていない状態でこの依頼を引き受ける気にはさすがになれなかった。
「・・・引き受けても良いですが、もう少し情報をくれませんか？」
「・・・すまない、俺の権限で知れる情報はここまでなんだ」
「じゃあ、残念ですがお断ｒ「分かりました、引き受けましょう」!?」

さっきから横で黙って話を聞いていたかと思えばこれである。

「・・・おい、何言ってる分かっｔ「参加しておいて損はないだろ？今のうちに中学生ライフを楽しんでこいってうちのボスも言ってたぞ？」・・・」

ボスは最初からこの話を知っていたのか・・・。

・・・クソ。

かくして、俺はこの依頼を引き受けるに至ったのだった・・・。

0．8話　引っ越しの時間

「やぁ、君が赤城隼人君だね？防衛省から話は聞いているよ」

暗殺の依頼を受けてから数日たった今日、事前に渡された椚ヶ丘中学校の制服に身を包んだ俺は椚ヶ丘中学校のある一室で、ある男と面会していた。

「・・・よろしくお願いします」

「何もそんなに緊張する必要はないじゃないか。よりにもよって、君みたいな人がね？」

男は俺に偽りの笑顔を振りまく。

そう、今俺と向かい合っているその男とは、浅野學峯ーここ椚ヶ丘中学校の理事長であり、最近では日本の教育界の寵児とまで言われている敏腕経営者である。

だが、彼の笑顔から見え隠れする黒いオーラは、明らかに一般人のそれではなかった。

だから俺は、彼と面と向かい合うとどうしても緊張してしまうのだ。

「ところで、私の情報によると君は理数系があまり得意じゃないようだね」

「!?（なぜ知ってやがる・・・）」

「それはそうだよ、隼人君。私はこの学校を支配する立場にある。この学校に通う生徒の全てを支配者である私が知っていることは当然

のことだろう?」

「・・・心の内を読まないでもらっていいですか?それから、さらっと〝支配する〟っていう教師としてあるまじき発言があるような気がしたんですが・・・」

「支配は生徒を管理する意味での教育においてとても重要なのだよ。そうそう、さっきの話の続きだけど、ここでは〝あらゆる〟勉学ができるものが上に立てる学校だから、せいぜい君も頑張りなさい」

理事長は黒い微笑みを浮かべ、俺に激励の言葉を投げかけてくる。

・・・やっぱり俺は彼のことを好きになれない。

這う這うの体で椚ヶ丘中学校を後にした俺は、防衛省が周辺に手配したアパートに辿り着いた。

訓練で一人サバイバルをしたことはあるものの、アパートで一人暮らしをするのは初めてだ。

これから始まる、仲間も銃もない平和な新生活にどことなく期待を膨らませていた俺は玄関の扉を開けた。

中は白を基調とした小綺麗なワンルームに、モフモフの絨毯やソファー、テーブルやテレビなど、生活家具や家電がきれいに並べられていた。

部屋の隅には俺の荷物が入ってるであろう大量の段ボールが置いてあった。

家具は元から置いていないと聞いていたから、大量の俺の荷物を見た防衛省の人間が、家具を揃える上に荷物整理まで1人でするのは可哀想だからせめて家具だけでもと用意してくれたのだろうと思い、少し感激した。

ベランダがあったので出てみると、そこには町が一望でき・・・なかった。
なんせここは2階である。しかも向かいの建物が3階建てだから眺望もクソもない。

部屋に戻ってふと腕時計を見ると、既に午後4時を過ぎていた。
明日の学校の準備もしなきゃならない俺は、取り敢えず荷物の山の整理から始めた。
段ボールの中には、俺が部隊の拠点のロッカーに置いていた装備一式の他に、椚ヶ丘中学校の制服の予備や対朝生物用の特殊素材で作られたと思われるゴム状のナイフとＢＢ弾、それと見慣れないカジュアルな服がいくつか入っていた。
クリーム色のカーディガンに貼ってあったメモ紙には、

「せっかくの中学生ライフのお供にいいんじゃない？着たら写真撮って送ってね～♪　ミレーナより」

とあった。

（余計なお世話だよ・・・けどまぁ、今どきの中学生が制服と迷彩服しかないというのもおかしな話だからな～写真はともかく、ありがたく着させてもらうとするか）

俺が荷物の整理を全部終えた頃には、時計の針は7時を回っていた。
ひと仕事終えた俺は空腹感を覚え、何か作って食べようと思ったが、開けてみた冷蔵庫の中は当然の如く空っぽだった。
ため息をついた俺はふと、冷蔵庫の横にある未開封の段ボールに気づいた。

まさかと思って開封してみると、中から出てきたのは自衛隊の戦闘糧食数日分だった。
・・・どこまで防衛省の人間は親切なんだ。
いくつか種類があったが、俺は今日の気分で白飯とサバの生姜煮を選んだ。
レンジでチンして食べてみたが・・・普段戦場で食べる米軍のクソマズいレーションよりも遥かに美味くて思わず涙が出そうになった。
満腹になった俺は明日の登校の準備をし、風呂に入った後、寝る支度を整える。
ベッドに入ろうとしたとき、携帯電話が鳴った。
「もしもし～」
「おう、隼人。そっちの生活には慣れたか？」
「まだ初日だろうが！」
「何そんなにカリカリしてんだよ～」
「ハァ・・・してねぇよ」
相変わらず千賀との会話は疲れる。
「明日から学校か、楽しんでこいよ？」
「楽しかねぇよ。あと、お前はいつから俺の親になったのかな？」
「おっと、ボスが俺をお呼びだ。またな！」

「あ、オイ!チッ、また切られた・・・」

今のやり取りでどっと疲れた俺は今度こそベッドに入り、明日から始まる中学校生活を考えながら眠りについたー。

「あ～～～～～～～～!!!!!!楽しみ過ぎて寝れない!!!」

一学期
1話　始まりの時間

♪～ＭＧＳ３スネークーイーター～

スマホのアラーム音で俺はゆっくりと目覚める。
今日は待ちに待った新中学校生活の始まりである。
若干寝不足のような気もするが、そんなことはどうでもいい。

俺は目をこすりながら時計を見たが・・・は？
目をもう一回こすったが、結果は同じだった。

あろうことかスマホの時計は１２時を回っていた。

「あ～～～～～～！初日から遅刻してしまったじゃん!!!!」

俺は慌てて制服に着替え、用意していた荷物を持って玄関を飛び出したー。

Ｅ組校舎は、本校舎とは離れた裏山にある。家から猛ダッシュで本校舎の横を通り過ぎ、坂を駆け上がって校舎にたどり着いた時には、俺は完全に息が上がっていた。

「ハァ・・・ハァ・・・体力ねぇな・・・俺・・・」

ボヤきながら呼吸を整えた俺は、新生活の場もとい暗殺の場であるＥ組教室へと向かったー。

「おや、隼人君。初日から遅刻とは感心しませんねぇ～」

教室に入るなり、中にいた先生に注意を受けた。

「すいません、寝坊しちゃって・・・」

ん、待てよ。

今俺は誰と話している？

目の前には何だか暗い表情をしていた同じ年頃の連中（あ、同い年か）と、教卓の上に大量に積まれている表札と・・・なんだ、あの黄色いタコ。

「あ、申し遅れました。君の担任です。殺せんせーと呼んでください、ヌルフッフッフッフッ」

・・・どうやら超生物とやらは俺の想像の遥か斜め上を行っていたようだ。

情報通りと言えば情報通りだが・・・変な笑い方をする喋る、（生物的に）タコの担任にどうしても違和感が拭えない。

「そうそう、隼人君。皆さんに自己紹介をしましょう。折角ですしねぇ～」

殺せんせーに促され、考える事を強制的に止めた俺はみんなに向かって、

「初めまして、今日からこの学校に転入してきました。赤城隼人です。よろしくお願いします」

シンプルな挨拶をした。
というより、こんなどんよりした雰囲気の中で趣味はどうたらこうたらなんて語るなど、ただのキチガイである。
そんな中で、一人笑顔を浮かべていた少女、いや違う、少年がいた。
（あいつ冷静そうだから後で話を聞いてみるか・・・）
そう考えた俺は、用意されていた窓側最後尾の席に座ったー。

「渚、ちょっといい？」

「は、隼人君だっけ？えーと、どうしたの？」

いきなり話しかけられた上に、自己紹介をしていないのに名前を呼ばれた事に驚いた渚だったが、

「さっき教室の雰囲気が重かったんだけど、いつもあんな感じ？」

そう問いかけた瞬間、渚の表情が驚きから悲しみに変わった。

「あ～、嫌な事聞いたね。ごめんね」

「いや、いいよ。転校してきたばっかりだから、ここのことはあんまり知らないんだったよね」

そう言って渚は、この学校のシステムのこと、そして今朝の出来事を話してくれた。

渚がすべて話し終えたとき、俺は昨日会った男の黒いオーラの正体と、殺せんせーがあの見た目とは裏腹に、教師として優れている事を

悟った。

「おーい、渚！」

渚の親友である杉野の声が外から聞こえて俺は我に返った。

「あ～引き止めちゃったね、ありがとう！いろいろ教えてくれて」

「あ、うん。これからよろしくね！」

渚はそう言って、笑顔で教室を後にした。

教室に一人残された俺は、クラスが抱えている闇のことを考えていた。

クラス待遇が酷いというのは分かったが、1番腑に落ちないのはなぜそんな所を殺せんせーは選んだのだろうかという事だった。

教師として優れているなら、それ相応のレベルを教えるのは当然の理である。

それを、なぜ・・・。

「おや、隼人君はまだ帰らないでよいのですか？」

「・・・殺せんせー、一つ聞いてもいい？」

「にゅや、なんでしょう？」

「渚から色々聞いたけど、どうしてここに来ようと思ったの？」

少し殺せんせーの表情が曇るが、すぐに普段の顔に戻り、

「・・・隼人君、あなたはここに初めて来たのでしたね。それに、君の立場なら私の事をいくらでも知れるでしょうから少しだけ話しますが、他の人には絶対に口外しないでください」

「・・・分かりました」

俺の返事を聞いた殺せんせーは、彼がある人と交わした約束について語りだしたー。

アパートに帰り着いた時はもう夜だった。
用意した晩御飯をさっさと食べようとするが、食欲が湧かない。

（ハァ・・・これから俺はどうすればいいんだろうか・・・）

理由は、さっき学校で聞いた殺せんせーの話だ。

殺せんせーがこの学校にやってくる前、E組には雪村あぐりという担任がいた。
彼女は、落ちこぼれで本校舎の生徒から差別待遇を受けている彼ら、今のクラスメート達の多くを励ましつつ、熱心に授業を教えていた。
しかし、せんせーが月を吹き飛ばしたのと同じ日に彼女は忽然として姿を消した。
どういう経緯かは教えてくれなかったが、せんせーと彼女は面識があったようで、彼女が姿を消す少し前に彼女は生徒達を教えてほしいとせんせーに頼んだそうだ。

しかし、まぁ、聞かなきゃよかった。
今、俺がせんせーを殺してしまったら、彼らは落ちこぼれのまま取り残されてしまう。
それじゃ消えた雪村さんが浮かばれないではないか。
だったら、俺はこの場にいないほうが・・・
戦争屋としてあるまじき〝情〟が芽生えてしまったのだ。

・・・電話が鳴った。

「・・・もしもし」

「・・・上手く殺れているか」

「!?・・・ボス」

「どうした、いつものお前にしては少し負の感情を強く感じる」

（・・・ボスにはお見通しか。）

俺は今悩んでることを洗いざらい話そうかと思ったが、殺せんせーとの約束もあったから、そこは上手くぼかして話した。

「・・・悩む必要はない」

「え・・・?それってどういうこと?」

「そもそもだ、お前に奴を殺すことはできん。俺が言うから間違いない」

「・・・そいつは少し心外だな」

俺は少しイラつきを見せた。

「元のお前に戻ったな。そうだ、それでいい。奴もお前ごときに殺されるようなタマじゃない。クラスの連中と安心して生活を続けるといい」

俺はボスがまるで殺せんせーの事をよく知っているかのように話すことに違和感を覚えたが、それで自分の心が少し軽くなった事にも気づいた。

「・・・ありがとう、ボス。少し気が晴れたよ」

「・・・フッ」

電話は一方的に切れたものの、切る直前に彼が笑ったのを俺は聞き逃さなかった。

(ボスの言う通りだ、何があろうと俺はここで暗殺を続ける。それが俺の任務だ)

俺は自分にそう言い聞かせ、ベッドへと入った。

「あっ・・・風呂入ってねぇ・・・入ろ」

2話　慣れ合いの時間

みんなの事を知った俺は次の日からクラスになじめるよう行動を開始していた。

名前と顔を覚えるのは元から得意だったから、殺せんせーから顔写真付き名簿を貰って数分で覚えた。

更には職員室の殺せんせーのデスクに隠してあった「生徒データ」なるメモ帳を見つけたので、それに書いてあるみんなの趣味も覚えた。

そして、趣味についてその日の夜に多少の知識をつけて次の日の学校に備えた。

正直言って、ここまで備えるのは普通の中学生として異常かもしれない。

だけど、ネメシスに初めて入隊した時に今と同じようにみんなの事を知ろうとしたから今の仲間との良好な関係（自称）が築けた・・・

まぁ、つまるところ経験則ってやつだ。

～翌日～

「お、倉橋さん、中村さんおはよ～何してるの～？」

「あっ、隼人君おはよ～今ね～ナイフケースをデコってるの！」

「ドヤァ～かわいいっしょ！」

「おお～かわいいじゃん！けど、ちょっと貸してみ？」

「え？あ、うん！いいけど」

俺は倉橋からナイフケースを受け取ると、机に並べてあった青色

ビーズをメインに何も手をつけてない裏面にデコレートしていった。

「ほら、できた。はいどーぞ」

「うわぁ・・・綺麗・・・」

そこには、世界で最も美しい蝶の一種である『ペレイデスモルフォ』が精密にデコレートされていた。

「倉橋さんって確か生物好きだったよね？気に入ってくれた？」

「うんうん！ありがとう!!」

倉橋は首をぶんぶんと縦に振って頷いてくれる。

「いいな～私のにもなんか作ってよ～」

「しょうがねぇなあ～」

中村のナイフケースを受け取った俺は、同じようにデコレートしていく。

「ほーらよ、できたぞ」

「おお～！めっちゃいいじゃん!!」

中村のナイフケースには、ダイヤビーズをふんだんに使ったピンクのハート付きの、高級ジュエリーにでも置いてそうなクオリティの十字架がデコレートされていた。

「隼人くんって、手先器用なんだね～！」

「まあな～、こう言う細かい作業は割と好きでね～」

（爆弾処理の訓練の賜物なんだけどな・・・）

３人が仲良さそうに話しているのをを端っこで見ていた前原と岡島は、

「・・・クソ」

そう独り言ちていた。

午前中の授業が一通り終わり、昼食のじかんになった。

それにしても、今日はとても天気が良い。

（折角だし、外で食べるか・・・）

俺は弁当を持ってふらっと校庭に出た。階段に杉野が座り込んでいたのを見て、

「どうした、杉野？」

と、声をかけた。

「ああ、隼人か。昨日、殺せんせーにこの対せんせー弾を埋め込んだボールを投げたんだけど失敗しちゃって・・・」

（あ～そういえば杉野前は野球部だったんだっけ・・・）

彼が落ち込んでいる理由の見当をつけた俺は、

「せんせーが異常なだけだよ、お前のも十分いい球だよ」

そう言って彼を励ました。

しかし、彼の顔は浮かないままだ。

何とかしてあげたいと考えていると、

「そうですよ、杉野君。君は野球に対する情熱は人一倍あります」

「殺せんせー・・・」

・・・彼が落ち込んでる原因がやってきた。

「そうですね・・・落ち込んでる杉野君に先生から一つアドバイスをあげましょう」

そう言うと殺せんせーはいきなり触手で杉野を持ち上げると、体のあちこちをこねくり回し始めた。

「何して・・・あー、そういうことか」

俺は殺せんせーがなぜそんなことをしているか納得した。

「何してんだよ、殺せんせー！生徒に危害加えないって契約じゃなかったの！」

外での出来事に気づいた渚がそう言って駆け寄ってくる。

昨日の杉野の暗殺を殺せんせーが根に持ってるとでも思ったのだろうか、語気が荒い。

（んーいや・・・危害を加えてように・・・見えなくもないか・・・）

「ヌルフッフッフッフッ、杉野君。昨日見せた癖のある投球フォーム、メジャーに行った有田投手を真似ていますね？」

「!?」

「でもねぇ、触手は正直です。有田投手と比べて、君の肩の筋肉は配列が悪い」

「・・・どういう事だよ」

「君のような体では彼のような剛速球は投げられません。どれだけ有田選手の真似をしても無理です」

「な・・・「何で・・・」！」

杉野より早く渚が反応した。

「何で・・・先生にそんな断言できるんだよ・・・」

渚は拳を握り締め、震えていた。

「あの～お怒りのところ悪いんだけど・・・」

この空気は流石に不味いと思った俺は慌ててスマホを取り出し、杉野と渚に見せた。

『有田投手に謎の触手攻撃!?』

という見出しのネット記事には、明らかに殺せんせーのものと思わ

れる触手が有田投手をこねくり回している写真も載っていた。

「・・・これ殺せんせーだよね？」

「ええ、隼人君。先生、昨日本人に確かめてきました」

「「確かめたんならしょうがない!!」」

「サインももらいました・・・ウゥ・・・」

『ふざけんな触手！　　有田』

「その状態でサイン頼んだの!?そりゃ怒るよ！」

渚が怒るのを止め、ツッコミを始めたことで取り敢えず険悪なムードは回避できた・・・しかし、

「・・・そっか、やっぱり才能が違うんだな・・・」

杉野は才能ある人とは違うという現実にさらに落ち込んでしまった。

何とかして励ましたいが、ここまでくるとかける言葉も見つからない・・・

「一方で、肘や手首の柔らかさは君のほうが素晴らしい。鍛えれば彼を大きく上回るでしょう。いじくり比べた先生の触手に間違いはありません。才能の種類は一つじゃない」

そう言って殺せんせーはポンと彼の肩をたたいた。

いつの間にか杉野の顔から翳りは消えていた。

「君の才能にあった暗殺を探してください」

そう言い残して殺せんせーは職員室へと帰っていった。

「・・・肘や手首は俺の方が・・・俺の才能、か・・・」

そう呟く杉野の表情はとても明るかった。

（流石殺せんせー、生徒の為にそこまで・・・）

こうして、校庭での昼食時間は終わった。

（・・・あっ、昼飯食い損ねた）

3話　先生の時間

「・・・これはどういう状況なの？茅野さん」

俺は目の前の異様な光景に言葉を失っていた。

事は数分前、放課後教室で寝てた俺は外が騒々しくて目を覚ました。

「・・・騒がしいな、あいつら何やってんだか・・・」

目覚めの悪い起き方をして少し不機嫌になった俺は外の様子を見に行った。

（・・・なんだあれ）

視線の先には、倉庫横の木の枝に括りつけられた殺せんせーと、その下にナイフを持って群がるみんな。

「あっ、隼人君起きたんだ」

俺に気づいた茅野が声をかけてくる。

「こんだけ騒がしかったらな・・・ところで・・・これはどういう状況なの？茅野さん」

俺は目の前の異様な光景に言葉を失っていた。

「こんにちは」

後ろから男の声が聞こえ、振り返りると・・・防衛省の烏間さんが立っていた。

「明日から俺も教師として、君たちを手伝う」

「え・・・烏間さんも教師やんの!?」

「そーなんだ!じゃあこれからは烏間先生だ!」

「ああ、よろしく頼む。ところで、奴は?」

・・・そういえばさっきの状況の説明をまだ聞いてなかったな。

「それがさー、殺せんせークラスの花壇荒らしちゃったんだけど、そのお詫びとしてハンディキャップ暗殺大会を開催してるの!」

烏間先生は目の前の異様な光景に言葉を失った。

そりゃそうだ、事情知らない人からしたら誰だってこれは言葉失うよ・・・。

「ほら、お詫びのサービスですよ?こんなに身動き取れない先生は滅多にいませんよ!」

先生の顔は縞模様、完全に舐め切っている。

「もはや暗殺と呼べるのか・・・」

烏間先生が呟く。

((・・・まったくもってその通りだと思います。))

「でも待てよ・・・殺せんせーの弱点からすると・・・」

いつの間にか隣にいた渚はそう言うとポケットから〝殺せんせーの弱点ノート〟なるメモ帳を取り出した。

渚の開いたページには、

『カッコつけるとボロが出る』

とあった。

「・・・これほんとに弱点なのか？」

答えはすぐに出てきた。

「ヌルフッフッフッフッ、無駄ですねぇE組の諸君！このハンデをものともしないスピードの差、君達が私を殺すなど夢のまたy・・・ドサッ・・・あ」

殺せんせーの動きに耐えられなかった枝が折れ、身動きの取れない殺せんせーが地面に落ちてきた。

「「「「・・・今だ殺れー!!!」」」」

「ニュヤアアアアアアア!!!」

クラスのみんなが一斉に殺せんせーに襲い掛かる。

殺せんせーは地面を転がってみんなの攻撃を躱していくが、紐が絡まって中々脱出できないようだ。

「・・・なんか、そのメモ使えるな・・・。」

「う、うん。どんどん書いていこう！」

なんとか紐を解いた殺せんせーは倉庫の屋根まで脱出した。

「ここまでは来られないでしょう、基本性能が違うんですよ、バ、バーカ！ヌルフッフッフッフッヌルフッフッフッフッヌルフッフッフッ・・・ハァ・・・ハァ・・・」

（あいつ疲れてる・・・チャンスかもな）

ふと思った俺は、ポケットから拳銃を抜いて迷わず発砲した。

放たれた対せんせー弾は殺せんせーの頭へまっすぐ飛んでいったが、寸でのところで躱されてしまった。

「ニュヤッ!?あとちょっとで当たるところでした・・・皆さんへの明日出す宿題を二倍、千賀君は3倍にします」

「「「「（器が）小せぇ!!!」」」」

殺せんせーはそのままどっかへと飛んでってしまった。

「あ、逃げた！」

「でも今までで一番惜しかったね！」

「この調子なら殺すチャンス必ず来るぜ！」

クラスのみんなは今回感じたかなりの手応えを感じたらしく、みんな嬉々としていた。

「・・・世間一般から見たら異常でしょうね～ここは」

銃をしまった俺は烏間さ・・・先生に話しかけた。

「ああ、確かにな。だが、この学校で一番生き生きとしているのはここだ」

さっき理事長へ挨拶しに本校舎に行った時、他のクラスの様子を見ていた烏間先生はそう俺に言葉を返した時、

「おい隼人、お前の射撃凄いな！その距離から殺せんせーを狙えるのか！」

そう言って磯貝を筆頭にみんなが俺の元に駆け寄ってくる。

「まぁな～何かを狙うのが大好きでね～」

俺は若干回答をはぐらかした。

烏間先生はそのことに気づいた。

（まさか、自分の本業を伏せているのか・・・）

「そうだとしても、並の事じゃないよ！」

「ああ、まったくもってその通りだ」

俺の後ろにいた男が相槌を打つ。

「だよな～・・・誰？「「千賀!?」」

なんと、後ろに立っていたのは千賀だった。

「おい、何でお前がここにいるんだ！部外者は立ち入り禁止だぞここは!!」

烏間先生が千賀を問い詰める。

「えーと・・・隼人君・・・「「あの人誰？」」

みんなが頭にハテナを浮かべて聞いてくる。

「部外者とは失敬な！やぁ、君達。俺は千賀正信だ。隼人や烏間とはお友達でね～俺も烏丸と副担助手という形でお手伝いさせてもらうよ」

「何、そんなことは聞いてないｚ「サプライズ演出だよ～」」

「「そんなサプライズ要らん（ねぇよ）!!」」

烏間先生が防衛省に確認を取ったところ、コイツの送り主は国連だった。

恐らく、殺し屋に縁のない日本政府じゃ信頼できないと思っての事だろう。

（ん、待てよ。俺も信用できないに入ってるのか!?任務終わったら事務総長でも締め上げようかな・・・まぁ、それにしても・・・面倒なのを送り付けてきたな・・・）

「というわけで、よろしくな！それと隼人、ちゃんと俺の事〝お前〟

じゃなくて〝先生〟と呼ｂ・・・グハッ！」

「断じて呼ばんわ」

「ハハ・・・相変わらずだな・・・それと、今日からお前んところに泊めてもらうからな～」

「ハァ!?冗談じゃねえよ！東京拘置所の独房にでも泊めてもらえ！」

「オイオイ俺の扱いひどくねえか!?」

「いつものことだろ!!」

俺と千賀のやりとりを見たみんなと烏間先生は、もう苦笑するしかなかった。

みんなが先程の片づけを終えて帰った後、俺はまた教室に一人残っていた。

ちなみに、千賀の生活場所だが最終的に毎日の晩飯を千賀が作る事と俺の正体をばらさない事を条件に俺ん家に住むことで決着した。

まぁ、けどあいつが出てきてくれたおかげで俺の正体をはぐらかすことに成功したんだからこのくらい良しとすべきなんだろうか。

「隼人君、まだ残っていたのか」

教室の入り口に烏間先生が立っていた。

「はい、一人でボーってするのが最近の日課でして・・・」

「普段の君ならそんなことできないだろうからな」

恐らく、俺の部隊内での話をしているのだろう。

「ええ、そんな隙見せようものならボスからナイフが飛んできますから」

「君も大変だな」

「本当ですよ、今のうちに平和を楽しんでおかないと」

そういって俺は烏間先生に笑顔を向ける。

「そういえば、クラスに君の正体を伏せているのか」

烏間先生が単刀直入に聞いてくる。

俺は一瞬表情を強張らせるも、すぐ元に戻って、

「・・・ええ。みんな俺の本業が戦争屋と知ったら俺を避けるでしょうし、それに俺自身みんなと接するときはそのことを忘れていたいんです。折角の平和なんですから・・・」

「だが、この教室は暗殺教室だ。普通の教室とは違「いいえ」」

きっぱりとした否定の言葉で烏間先生の話を遮った。

「確かにここは暗殺教室です。ただ、相手は殺すことの難しい超生物であって、俺みたいに人間相手じゃない。俺は今まで何百という人間を殺し、その血を浴びてきた。そのことを知った上で俺に普通に接してくれる奴がいると断言できるんですか?」

烏間先生も何か反論したそうだったが、黙り込んだままだ。

「おっと、もう４時か・・・そろそろ帰りますね、烏間先生。また明日！」

腕時計の針が４時を回っていたことに気づいた俺は席を立ってリュックを背負い、先程のとは違う”上辺だけの”笑顔で挨拶した。

「ああ、また明日」

烏間先生は俺にかける言葉が見つからないせいか一瞬悔しい表情を浮かべていたが、それを見るのも何か申し訳なく思った俺は教室を後にした。

４話　訓練の時間

「「「「1、2、3、4、5、6、7、8」」」」

「晴れた午後の運動場に響く掛け声、平和ですねぇ・・・生徒たちの獲物がなければですが」

殺せんせーが独り言を言う。

「立位方向から、ナイフを正しく振れるように」

烏間先生がみんなに指示を飛ばす。

今は体育の時間で、俺達はナイフを振る練習をしている。

昨日の一件があるので、怪しまれないよう俺も練習に交じっていた。

「体育の時間は今日から俺と烏間が受け持つからな」

千賀が殺せんせーにそう告げる。

「・・・ちょっと寂しいですねぇ」

「この時間はどっかに行ってろと言っただろう、そこの砂場で遊んでろ」

烏間先生がバッサリそう言うと殺せんせーはシクシク泣きながら砂場でお山を作りはじめた。

「グスッ・・・ひどいですよ烏間先生、私の体育は評判よかったのに・・・」

「嘘つけよ、殺せんせー身体能力違いすぎんだよ」

規定数のナイフを振り終えた菅谷が言う。

「この前もさぁ、反復横跳びマッハでやってしまいにはあやとりも始める始末だったじゃん」

（は？無理だろそれ）

どうやら俺が転校する前の殺せんせーの体育はとんでもないものだったようだ。

「異次元過ぎてねぇ～」

「体育は人間の先生に教わりたいわ～」

みんなが口々にそう言う。

殺せんせーはさらに落ち込んで砂場に小石を積み上げ始めた。

「よし、授業を続けるぞ」

烏間先生がみんなに促した時に前原が、

「でも烏間先生、こんな訓練意味あるんスか？しかも、当のターゲットがいる前でさ～」

「勉強も暗殺も同じことさ、基礎は身につけるほど役立つってもんだ」

烏間先生ではなく、千賀が前に出てそう前原に返す。

「どけ千賀。お前も今はいらないから砂場で奴と遊んでろ」

千賀はシクシク泣きながら殺せんせーと小石を積み上げ始めた。

「続けよう、磯貝君、前原君、前へ。そのナイフを俺にあててみろ」

烏間先生が言う。

「え、いいんですか？」

「二人がかりで？」

「そのナイフなら俺たち人間にケガはない。掠りでもすれば、今日の授業は終わりでいい」

烏間先生はそう言ってネクタイを緩める。

（さあてと・・・烏間先生のお手並み拝見といきますか）

俺は心の中でそう呟いた。

「ええと・・・それじゃあ・・・」

二人は一瞬顔を見合わせた後、ナイフを構える。
最初に仕掛けたのは磯貝だった。
磯貝の突きを烏間先生は体を少し捻って躱す。

「・・・さぁ」

磯貝の攻撃をいとも簡単に躱したことに驚いていた前原を烏間先生が挑発する。
前原もそれに乗って突きを繰り出すも、あっさりと受け流される。
その後も何度もナイフを振る二人だったが、その攻撃が烏間先生に

当たることはなかった。

「このように多少の心得があれば、素人二人のナイフくらいなら、俺でも捌ける」

烏間先生のさらなる挑発に苛立ちを見せた二人は同時に突きを繰り出す。

が、烏間先生はそれを見切って二人の手首を捕らえ、捻って地面に投げた。

（流石、第一空挺団出身だけの事はあるか・・・）

俺は烏間先生の実力に感心していた。

「俺に当てられないようでは、マッハ２０の奴に当たる確率は皆無だろう。見ろ！今の攻防の間に奴は、砂場に大阪城を作った上に着替えて茶まで点てている」

「「腹立つわ～」」

「てか、千賀先生まで着替えてるし・・・」

いつの間にか千賀も豊臣秀吉の甲冑を着て殺せんせーの茶を嗜んでいた。

てか、それどこで手に入れた・・・。

「クラス全員が、俺に当てられるようになれば少なくとも暗殺の成功率は格段に上がる」

烏間先生は倒れた二人を起こし、ネクタイを締めながら俺達に言う。

「ナイフや狙撃、暗殺に必要な基礎の数々、体育の時間で俺と千賀で教えさせてもらう。では、今日の授業はここまで」

「「「「ありがとうございました！」」」」

こうして、体育の授業は終わった・・・はずだったのだが。

茶会の時から千賀と何か話していた殺せんせーが烏間先生の元へ向かい何かを耳打ちした。

一瞬驚いた表情を見せた烏間先生だったが、すぐに元の表情に戻り、

「隼人君、君はまだだ」

そう俺に告げた。

みんなが驚いてこちらを見る。

「・・・なんですか？」

「君の実力が見たい、どちらかが心臓にナイフを当てたら勝利だ。その際の打撃も投げも有効とする」

真剣な表情でそう言った烏間先生は俺に対してナイフを構える。

「待ってください！隼人の実力が見たいってどういうことですか？」

磯貝がみんなの疑問を代表して言う。

「まぁ、今にわかるさ。だから隼人、受けるんだ」

千賀も珍しく真剣な表情でみんなと、そして俺に言う。

一応、殺せんせーの方を見てみると、微笑みながら軽く俺に対して頷いていた。

（何もかもお見通しってか・・・ハァ・・・余計なことを）

みんなが息をのんで見守る中、俺はナイフを構えた。

先に仕掛けてきたのは烏間先生だった。

５ｍ先にいる俺に向かって一直線に突進し、ナイフを一閃したその間約１．２秒。

クラスの誰もが殺られたと直感したが、殺せんせーと千賀の顔だけは二ヤけていた。

5話　信頼の時間

烏間先生の初撃は俺に当たらなかった。
烏間先生の動きを見切って俺が受け流していたからだ。
さらに0．2秒ごとに繰り出される2撃、3撃も全て見切って防いでいく。

「・・・すごい、隼人君」

「烏間先生の攻撃をすべて防いでやがる・・・」

みんなが俺の動きに驚きを隠せない中、烏間先生の攻撃はさらに激しさを増していった。
俺はそれら全てを捌く或いは防いでいる。
突如、烏間先生の攻撃が止む。

「防戦一方だぞ、攻撃してこないのか?」

烏間先生が前原や磯貝の時と同様に挑発してくる。

「・・・どうなっても知りませんよ」

俺はそう言うなり、5m先の烏間先生に突進してナイフを一閃した
その間1．0秒。

「っ！（俺よりも初撃が速い！）」

烏間先生は寸でのところで仰け反って躱すが、その瞬間に俺は烏間先生との距離を一気に詰め、傾いた重心を利用して大外刈りを決めた。
咄嗟に受け身を取ってダメージを最小限に抑えた烏間先生は、体の

バネを利用して仰向けの状態から蹴りを繰り出してきたが、それを飛びのいて躱す。
その間に烏間先生は立ち上がって体勢を整えた。
「危なかった・・・油断は許されないな」
「・・・今のは殺れたと思ったんですけどね」
「だが、もう君の攻撃が届くことはない」
烏間先生はそう高らかに宣言する。
俺は再び烏間先生に突進してナイフを振るう。
今度は流石に見切られ、腕を捕らえられた。
烏間先生は捕らえた腕を捻りながら自分の方へ引き込んでいき、俺のバランスを崩した。
俺がマズいと思った時には遅かった。
「・・・グハッ!」
俺は背中から地面に叩きつけられていた。
烏間先生はそのままナイフを突き立てようとするも、体のバネを利用し、渾身の力で蹴りを繰り出す・・・が、これを腕で防がれてしまった。
烏間先生のナイフは何とか捌いたものの、さっきの攻防で体力をあらかた使い果たしていた。
距離を取ろうとして立ち上がろうとするも足に力が入らない。唯一の防御手段の腕も自分の体を支えるので精一杯だ。
(・・・ここまでか)
半ば諦め、負けを受け入れようとした時、

「隼人～頑張れ～！」

「まだいけるよ、隼人君!!」

そんな声が聞こえてきた。

声のした方を見ると・・・みんなが僕を応援してくれているのが見えた。

（・・・なんで。今の攻防で間違いなく俺が只者じゃないと感づいたはずだ。なのに・・・なんで・・・）

「おい、それで終わりか？」

烏間先生の挑発で俺は現実に引き戻される。

しかし、烏間先生の表情は笑顔を浮かべているようにも見えた。

そして俺も、さっき見せていた諦念はこれっぽっちもなくなっていた事に気づいた。

（みんなが応援してくれている・・・そうだ、俺はまだやれる）

一瞬回復した体力を使いバク転して飛び起き、烏間先生と距離を取った俺は再びナイフを構える。

「ハァ・・・ハァ・・・次で決めます」

ほぼ気力だけで立っている俺は烏間先生に向かって笑顔で宣言する。

「ああ。来い！」

烏間先生も口元に笑みを浮かべ、常に防御できる構えを取った。

そして刹那・・・勝負は着いた。

突進してきた俺に対して烏間先生は先程と同じようにナイフを持った腕を捕らえようとした。

しかし、俺はナイフを振るう寸でのところでナイフをわざと落とした。

烏間先生の意識が一瞬ナイフに向いた隙をついて大内刈りをかけた。

烏間先生が倒れこむのと同時に、俺は先生の持っていたナイフを先生の腕ごと振り下ろした。

「・・・勝負あったみたいですねぇ」

暫くの沈黙の後、ニヤついている殺せんせーが言った。

その瞬間、みんなは歓声を上げて俺の元へやってきた。

「すげぇよ、隼人！烏間先生を倒すなんて！」

「うんうん、とってもカッコよかったよ！」

みんなが口々にそう言う。

「最後にあれほどの体力を残していたとはな、殺られたよ」

烏間先生が起き上がって、俺に笑顔を見せる。

「いえ、体力は残ってませんでしたよ。みんなの声援があったからこ

です」

「なら、何かみんなに言わなくちゃならないことがあるんじゃないか？」

烏間先生はそう言ってみんなの方を見る。

「・・・みんな、聞いてくれ」

みんな静かになり、俺の話に耳を傾ける。

「まず、さっきは応援ありがとう。おかげで烏間先生に勝つことができた」

そこで一瞬そのあとの話をするかどうか迷ってしまう。

しかし、みんなの後ろで殺せんせーや千賀、烏間先生が僕を見て頷いているのが見え、決心した。

「俺・・・実は・・・戦争屋なんだ」

「「「「うん、知ってた」」」」

「そうか・・・え!?知ってた!?」

「そりゃそうじゃん、この前の射撃もさっきの格闘も普通の中学生じゃ到底できないもん」

「それに、お前授業中に寝てるとき寝言で銃の名前と性能をずらずらと言ってるし」

（え、そうなの!?）

「ちゃんと録音も取ってあるよ～」

ゲスい笑みを浮かべた中村がスマホの音量を大にして再生ボタンを押す。

『ｚｚｚ・・・ＳＣＡＲ―Ｌ、ＨＫ４１６、Ｍ４は共に５．５６ｍｍ・・・ｚｚｚ・・・Ａｋシリーズは７．６２ｍｍ』

「うわあああああああああああ、ちょ、待って恥ずかしいからやめて!!」

「それに、お前殺せんせーいないのに廊下で銃を持ってスキップしてる時もあるし～」

今度は岡野が、殺せんせーがいない日なのに俺が廊下で銃を手に持ってスキップしてる盗撮写真を見せてきた。

「あああああああああ!それもダメ!!恥ずかしいから!!」

俺の顔は自分でもわかるくらい真っ赤になっていた。

みんなはそれを見て大笑いしている。

「なぁ、隼人」

磯貝が笑うのをぐっとこらえ、俺に真剣な表情で呼びかける。

みんなも笑うのを止めてまっすぐに俺を見つめる。

「実は、昨日千賀先生から隼人以外の全員にＬＩＮＥが来て、隼人の事について教えてくれたんだ。俺達はさっき隼人が戦ってた時にそのことを話したんだ。俺達は隼人といるのが楽しいし、隼人も楽しそう

にしているから。だから、隼人がそんなこと考えてたなんて思ってもなかった。気づくことができなくてごめん」

そういうと、磯貝は頭を下げた。

「そんな・・・頭をあげて！悪いのは俺なんだ！俺が臆病だったばっかりにみんなにこのことを伝えることができなかったんだ・・・ごめん」

俺はみんなに頭を下げる。

「じゃあ、隼人君に一つ聞いてもいい？」

渚が前に出てきて言った。

「・・・何？」

「隼人君、転校してきたその日に殺せんせーから生徒名簿を借りて名前とか、あと僕たちの趣味とか覚えてくれてたよね。それはどうして？」

「・・・みんなと仲良くなりたかったからだ。今まで戦場で暮らしてきた俺にとってこの教室は、なんか安心できたんだ。そして、みんなと話したり授業を受けたりするのが普通に楽しかったんだ」

俺は本心でそう言う。

「授業中結構寝てるけｄ・・・グホォ！」

「黙ろうか岡島ぁ」

連れていかれる岡島をよそに、

「そっか、なら、僕達が隼人君を拒絶することなんて絶対にないよ。過去はいろいろあったかもしれないけど、こんなに仲良くしてくれる隼人君を僕達は、見捨てないよ」

渚がそう言った時、俺の心の中のもやもやが一気に晴れた。
そして、気づいたら俺は涙を流していた。
その涙を見て、みんなは笑顔で俺をクラスの円の中に迎え入れてくれる。

俺が、生まれて初めて幸せを感じた瞬間だった。

6話　カルマの時間

〝本当に〟俺がクラスに受け入れられた日から一夜明けた今日、俺は普段通りに学校に登校した。
教室に入った途端、俺は教室が異様な空気ー俺が初めてこの教室に来た時もこんな感じだったーに包まれてることに気づいた。
何かあったのだろうかと思いながら俺は自分の席に向かうが、そこで俺は今まで学校に来たときは空席だったところに、見知らぬ生徒が座っていることに気づいた。

「おはよう、原さん」

「ああ、隼人君・・・おはよう」

「・・・何かあったの？」

俺が聞くと、原さんは無言で前を指差した。
前を見ると・・・教卓の上にキリで脳天を刺された本物のタコがあった。
その生徒は薄ら笑いを浮かべているから、彼が犯人なんだろう。
問い詰めようと思って立ち上がろうとした時、殺せんせーが入ってきた。

「おはようございます、ニュ？どうかしましたか、みなさ・・・」

殺せんせーも教卓の上のものに気づいたようだ。

「あっ、ごっめ～ん。殺せんせーと間違えて殺しちゃった～。捨てとくから持ってきてよ～」

「ふ～ん、分かりました」

殺せんせーはタコを持ち上げて奴の前まで持っていく。
俺はその態度にとても腹が立ったが、その時俺は彼が対せんせーナイフを隠し持ってることに気づいた。
そう、これは陽動だったのだ。
殺せんせーはだんだん彼に近づいていき・・・立ち止まった。
すると殺せんせーの触手がドリルになった。

（え・・・ドリルになるの・・・触手って）

そして殺せんせーはどこかへ行ったかと思うと、小麦粉にキャベツ、ネギに卵にかつお節に青のりにソースなどの食材にボウルや包丁などの道具類、そして・・・ミサイルを持ってきた。

「・・・見せてあげましょう、カルマ君。このドリル触手の威力と自衛隊から奪っておいたミサイルの火力を」

そういって殺せんせーはミサイルに点火した。

（いやいやいやいや、ミサイルここで使って大丈夫なのか・・・）

「ご心配なく隼人君。弾頭は外してありますし、火力も実は少しだけ抑えています」

「そう言う問題でもないような・・・てか、私の思考読むのやめてくれません!?」

殺せんせーと俺のやり取りに少しだけ教室が和んだ。

「さてカルマ君、先生は暗殺者を決して無事では返さない」

そう言うと殺せんせーは・・・ボウルに卵を割って小麦粉と混ぜてキャベツとねぎをみじん切りにして入れて・・・そんなこんなしてできたものをカルマ・・・だっけか、そいつの口に放り込んだ。

「・・・・!プハッ!」

あまりにも熱くて彼は吐き出したが、先生が作っていたものは・・・。

「その顔色では朝食を食べていないでしょう?マッハでたこ焼きを作りました」

(おお!あれが日本のたこ焼きか〜!こっちにいた時食ったことなかったからなぁ〜あとでもらお!)

「これを食べれば健康優良児に近づけますねぇ、はい、アーン」

カルマ君は先程ので口の中をやけどしたのか、口元を抑えている。

「カルマ君、先生は手入れをするのです、錆びてしまった暗殺者の刃を。今日一日、本気で殺しに来るがいい。その度に先生は君を手入れする。放課後までに君の心と体をピカピカに磨いてあげよう」

そう言って、先生はたこ焼きを全部口に放り込んだ。

・・・待てよ。

「あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!先生たこ焼き食べてみたかったのに!!!!!」

「ニュヤッ、隼人君!もっと早く言ってくださいよ!」

「・・・たこ焼き食べたかったな〜」

俺は割とガチで凹んだ。

「ニュヤーッ！すいません！家庭科の時に隼人君の分も作りますから！元気出して！」

「「「「どんだけたこ焼き食べたいんだよ!!!」」」」

みんなが突っ込み、クラスの雰囲気がいつもの感じに戻った。

一時間目の数学の時間に俺は、授業前に渚に頼んでおいた彼ー赤羽業についてのメモ書きを読んでいた。

（ふ～ん、成績優秀者だけど、暴力沙汰を起こして停学、E組行きになった・・・か。うん？昨日俺が帰った後に殺せんせーと接触、握手した時に掌に隠した殺せんせー物質で触手を破壊？なるほど、不意を衝く戦法が得意なわけか・・・）

「あー、カルマ君。銃を抜いてから撃つまでが遅すぎます。暇だったのでネイルアートを入れておきました」

俺がメモ書き読んでる間にカルマが暗殺していたようだが失敗したらしく、カルマの爪には見事なたこ焼きのネイルアートが・・・たこ焼き・・・

「先生、何でたこ焼きのネイルアートなんですか！隼人君がまた落ち込んでるじゃないですか！」

片岡さんが指摘してくれた時にはもう時すでに遅し、俺の目から光が消え失せていた。

「ニュヤーッ！すいません隼人君しっかりしてください！家庭科まであと少しですから！」

「「「「どんだけたこ焼きに執念あんだよ!!!」」」」

みんながまた突っ込んだ。

四時間目の家庭科の時間は、ミネストローネを作るという調理実習だったが、俺は渚のいる班にいて、手には殺せんせーの作ったたこ焼きがあった。

「どうです？不破さんの班はできましたか？」

「う～ん、どうだろう・・・なんか味がトゲトゲしてんだよね～」

「どれどれ・・・」

殺せんせーが味見した時、カルマがやってきて、

「へぇ～じゃあ作り直したら？一回捨てて」

そう言うなり彼は鍋の把手を叩いて中身をこぼし、その隙にナイフを振った・・・が、殺せんせーはそこにはおらず、スープも地面に落ちることはなかった。

一方のカルマは、大きなピンクのハートがついたエプロンを着せられていた。

「エプロンを忘れてますよ、カルマ君。スープならご心配なく。空中でスポイトで吸っておきました。ついでに砂糖も加えてね」

「おっ、マイルドになってる！」

「ヒュ～かわいい～」

カルマは寺坂組からエプロン姿を冷やかされていた。

「たこ焼き美味い・・・涙でそう」

そんな茶番の間に人生初のたこ焼きを口にした俺は・・・その美味さに思わず泣きそうになった。

「今までお前どんなもの食べてきたんだよ・・・」

同じ班の杉野が突っ込む。

五時間目の国語の時間は、とある小説を読んでいく時間だった。たこ焼きを食べて満足した俺は授業と・・・カルマの暗殺の行方に集中した。

カルマは殺せんせーが音読を始めてからずっと機会を伺っていた・・・が、

『・・・赤蛙はまたも失敗して戻ってきた。私はそろそろ退屈し始めていた・・・』

どうやらその事を読まれていたらしく、カルマはいつの間にか髪の毛を手入れされてしまっていた。

（ん、これってやけに状況にぴったりな文章だな!?）

まぁ、そんなこんなで、カルマの暗殺はことごとく失敗したのだっ

た。

放課後、渚がカルマを外まで追っかけて行くのを見た俺は、その後をつけていく事にした。

近くの適当な茂みに隠れて様子を伺ってみると、2人は裏山にある切り立った断崖の所にいた。

どうやら渚はカルマにみんなで協力しようと説得しにきたらしい。

だが、この雰囲気だと上手くいってないようだ。

「カルマ君、今日はたくさん先生に手入れされましたねぇ」

どこからともなく殺せんせーが現れた。

「まだまだ殺しに来てもいいですよ?もっとピカピカに磨いてあげます」

そう言う殺せんせーは完全に舐め切った顔をしている。

「確認したいんだけど、殺せんせーって〝先生〟だよね?」

いきなりカルマが訳の分からない質問をした。

殺せんせーはもちろん、肯定する。

「先生ってさ、命を懸けて生徒を守ってくれる人?」

「もちろん、先生ですから」

そこで、俺はカルマの意図が分かった。

「そっか、よかった。なら、殺せるよ・・・確実に・・・」

「おい待て、カルマ!」

俺が茂みから飛び出したときにはもう遅かった。
カルマは拳銃を構えながら崖から身を投げていた。

(なんて無茶を!この崖から落ちて普通の人間はまず助からねぇし、殺せんせーは救出に行けばその間に撃たれる可能性が高いが、スピードを上げ過ぎてもカルマの肉体がそれに耐えられない・・・大丈夫なのか殺せんせー・・・)

だが、俺の心配は杞憂に終わった。
殺せんせーは崖下の森に触手をクモの巣状に張り巡らして、カルマを見事に救い出したのだった。

「カルマ君、平然と無茶したね・・・」

「全くだ・・・」

崖上に戻ってきたカルマに渚が言う。

「別に~今のが考えてた限りじゃ、一番殺せると思ったんだけど」

「おや、もうネタ切れですか?報復用の手入れ道具はまだたくさんありますよ?君も案外ちょろいですねぇ」

カルマは少し苛立ったようだが、

「殺すよ、明日にでも」

前に浮かべていたような薄ら笑いではなく、爽やかな笑顔でそう返した。
殺せんせーも満足そうに、顔に赤丸を浮かべている。
ふとカルマがこっちを向いた。
「さっき俺が飛び降りるってことによく気付いたね～」
「あ、ああ。まあな」
「そういえば自己紹介がまだだったね～俺は赤羽業」
「赤城隼人だ。隼人でいいよ、よろしく」
俺はカルマと握手した。
「じゃ、帰ろうぜ、隼人、渚君。帰りに飯食っていこうよ～」
そう言って、カルマはポケットから財布を取り出す。
（ん、あの財布どこかで・・・）
「あーっ！それ先生の財布！」
・・・殺せんせーのだったらしい。
「職員室に無防備に置いとくなって～」
「ちょっ、返しなさい！」
「いいよ～」

そう言ってカルマは財布を殺せんせーに放ってよこした。
慌てて殺せんせーは中を確認するが、
「え・・・な、中身抜かれてますけど!?」
「はした金だから、募金しちゃった～」
殺せんせーは声にならない悲鳴を上げ、カルマを説教している。
まぁ、そんなこんなでカルマもクラスの一員としてスタートしたのだった。

「隼人～今日の晩飯はたこ焼きだぞ～!」
「・・・(出る幕無かったのに…知ってやがったのか・・・)」

7話　大人の時間

「あー、今日から来た、外国語の臨時教師を紹介する」

朝のホームルームで烏間先生は困惑しながら、俺達に言う。

まぁ、当の俺達も困惑してるのだが。

というのも、紹介された女教師が・・・殺せんせーとめっちゃベタベタしてるのである。

なんでこうなった・・・。

「イリーナ・イェラビッチと申しますぅ～皆さんよろしく！」

「すっげえ美人・・・」

「おっぱいやべぇな～」

男子が女教師の美貌に感嘆の声を漏らす一方で、

「・・・なぜベッタベタなの」

「・・・イラッとするわ～」

女子の冷ややかな声も聞こえてくる。

「本格的な外国語に触れさせたいとの、学校の意向だ。英語の半分は、彼女の受け持ちに文句ないな？」

烏間先生が殺せんせーに言う。

「仕方ありませんねぇ・・・」

「なんかすごい先生来たね～、しかも殺せんせーにすごい好意あるっぽいし・・・」

茅野と渚が話をしている。

「でもこれは暗殺のヒントになるかもよ?タコ型超生物の殺せんせーが人間の女の人ににベタベタされたても戸惑うだけだろうし・・・いつも独特の顔色を見せる殺せんせーは戸惑うときはどんな顔か、だね」

(ま、まぁ相手の動揺を悟る手段としては有効だろうな・・・さて、先生の反応は・・・?)

みんな殺せんせーに注目するが・・・顔をピンクにして・・・デレていた。

「いや、普通にデレデレじゃねえか」

「何のひねりもない顔だね・・・」

「う、うん。人間もありなんだ・・・」

みんな口々に突っ込む。

「ハァ～、見れば見るほど素敵ですわぁ～、その正露丸みたいなつぶらな瞳、あいまいな関節・・・私、虜になってしまいそう～」

「いやぁ～お恥ずかしい～」

殺せんせーは完全に女教師に気を許していた。

「騙されないで・・・殺せんせー」

「・・・そこがツボな女なんていないから」

女子は殺せんせーの事を嘆いていた。

（ん、待てよ。この女の顔・・・以前どこかで見たことがあるな・・・）

俺が女教師に見覚えがあると思ったと同時に、みんなもこの女が只者じゃないことを薄々感じ取っていた。

午前中の授業が終わり、昼休みとなった。

俺達は、殺せんせーとサッカーボールをパスをしながら暗殺を組み込むという（ある意味）高度な遊びをしていると、

「殺せんせぇ～」

校舎からあの女教師、イリーナがこっちに、いかにもぶりっ子のやりそうな走り方でやってきた。

「殺せんせぇ～烏間先生から聞きましたわぁ～すっごく足がお速いんですってね！」

「いやぁ～それほどでもないですねぇ」

相変わらず殺せんせーはデレている。

「お願いがあるのぉ～一度本場のベトナムコーヒーを飲んでみたくってぇ～、私が英語を教えている間に買ってきてくださらない？」

「お安い御用です、ベトナムにいい店を知ってますから！」

そう言うと、殺せんせーは昼休み終了のチャイムがなったと同時にマッハでベトナムに飛んで行ってしまった。

「で・・・えーと、イリーナ・・・先生、授業始まるし・・・教室戻ります？」

磯貝がイリーナに尋ねると、

「授業？各自適当に自習でもしてなさい」

・・・先程とは全く違う、明らかに別人のイリーナがいた。

「それと、ファーストネームで気安く呼ぶのやめてくれる？あのタコの前以外では教師を演じるつもりもないし。イェラビッチお姉様と呼びなさい」

彼女は取り出した煙草に火を点けながらそう言った。

（あ、コイツ紙巻派か・・・）

そんなどうでもいい事を思う俺と、もう一人を除くみんながこの状況に戸惑う中、

「で、どうすんの？ビッチ姉さん「略すな！」アンタ殺し屋なんでしょ？クラス総がかりで殺せないモンスター、ビッチ姉さん一人で殺れるの？」

・・・この状況に呑まれなかったもう一人であるカルマが、イリーナを挑発する。

「・・・ガキが。大人には大人の殺り方があるのよ。潮田渚ってアンタよね？」

突然呼ばれた渚は困惑するが、次の瞬間、渚はイリーナに・・・キスされてた。

「後で教員室にいらっしゃい。アンタが調べた奴の情報、聞いてみたいわ」

イリーナのディープキスを受けた渚は放心状態になり、その場にくずおれた。

「その他も有力な情報持ってる子は話しに来なさい。いいことしてあげるわよ、女子には男だって貸してあげるし。技術も人脈も全てあるのがプロの仕事よ。ガキは外野でおとなしく拝んでなさい。あ、そうそう。あと、少しでも私の暗殺の邪魔したら・・・殺すわよ」

いつの間にか、イリーナの後ろには重そうな荷物・・・おそらく銃火器を抱えた屈強そうな男達3人が控えていた。

この時、クラスの全員がイリーナはプロの殺し屋ということ、そして、嫌いだということを認識したのだった。

午後の最初の授業である英語は、イリーナの言う通り自習になっていた。

当の本人は、椅子に腰掛けてタブレットをいじっている。

大方、殺せんせーが帰った後に仕掛ける暗殺プランの確認でもしているのだろう。

ふと、渚の方を見たイリーナがウインクをする。

それを見た渚が身震いしたのを見て、

「・・・さっきのキスがそんなに良かったのかい？」

「違うよ!!!」

俺は渚をからかってやった。

いかん、渚弄り・・・ハマりそうだ。

「なぁ、ビッチ姉さん～授業してくれよ～」

「そうだよ～ビッチ姉さん～」

「ここじゃ先生なんだろ～ビッチ姉さん～」

みんなが口々にそう言うと、

「あ～～～～～～!!ビッチビッチうっるさいわね!!まず正確な発音が違う!!アンタら日本人は、BとVの区別もつかないのね、正しいVの発音を教えてあげるわ。まず、歯で下唇を軽く噛む、ほら！」

俺とカルマを除くみんながイリーナに従う。

「そうそう、そのまま一時間過ごしてれば静かでいいわ」

(((((なんなんだこの授業)))))

全員が彼女に殺意を覚えたその時、俺はイリーナの事を思い出した。

「・・・あんた、ここの副担知ってるか？」

「はぁ?ここの副担任って・・・烏間じゃないの?」

イリーナは呆れ気味に俺に言う。

「実はもう一人いてだな・・・千賀正信という男が」

その名前を出した途端、彼女の表情が一変した。

「!?・・・廊下に出なさい、話をしましょ」

イリーナに促された俺は、みんなに驚きの視線を向けられながら廊下に出た。

「で・・・何でアンタがあの男の事を知ってるの?彼はどこにいるの?それと、アンタもよ。何者なの?他のガキ共とは明らかに違うわよ」

廊下に出ると腕を組んで壁にもたれかかったイリーナが俺を尋問した。

その声色と表情は、明らかに俺を警戒している。

まぁ、それもそうだ。

会ったことのない人間が自分の事を知ってるなど、警戒して当然だ。

「俺は、〝ネメシス〟のメンバーだ。千賀は同じチームメイトだ。俺達は、日本政府と国連からの依頼で殺せんせーを暗殺しに来た。まぁ、あいつは別件でウチのボスから呼び出されて今日は居ない。アンタの事はあいつが自衛隊のＰＫＯで派遣された時に書いていた日記にお前の名前があったからまさかとは思ったが」

〝ネメシス〟という単語に眉がピクリと動いたイリーナだったが、千賀もそこにいるということには流石に驚きを隠せなかったようだ。

「あいつ・・・〝ネメシス〟だったのね。それと、アンタも同業者って訳ね・・・で、何？アンタは私の暗殺を邪魔する気？」

「まさか、そんな野暮な事はしねぇよ。ただ、俺のクラスにああ言う態度を取られるのは気に食わないだけだよ」

「何よ、聞くとここのガキ共って落ちこぼれ集団って言うじゃない。無駄な勉強するより私に協力した方がよっぽど有益じゃないの？」

ガタンッ・・・教室から音が聞こえた。
恐らく、みんな盗み聞きでもしているのだろう。
教室からかすかにみんなの殺気が漏れている。

「そうとも限らんさ、アンタは努力して色々克服したから今のお前があるんだろ？それと同じさ。みんな何かしら克服したくて、努力はするものさ」

それを無視して俺は反論する。

「・・・私とガキ共を一緒にしないで」

イリーナは胸の谷間からデリンジャーピストルを取り出し、俺に突きつける。

その瞬間、俺は即座に上半身だけ捻ると同時に銃を握っているイリーナの腕を捕らえ、射線を逸らした。

「・・・お前がプロと主張するのは一向に構わないし、俺達と無理に暗殺に関わる必要はない。お前の気持ちも少しは分かる。だがな、ここにいるクラスの連中は普通の生徒を演じながら、ターゲットである教

師の教えを生かし、柔軟な暗殺計画を練る・・・少なくとも奴の暗殺に関しては間違いなくプロと言えるだろう。決して落ちこぼれなんかじゃない。だから・・・これ以上みんなを見下すな」

そう言った時、俺は一瞬だけ殺気を放った。

効果は、それだけで十分だった。

イリーナは、自分が今受けた凄まじい殺気をまだ処理できてないようで、完全に体が硬直している。

そんなイリーナを尻目に、俺は教室へと戻った。

教室へと戻ると、みんなが俺の方を見ている。

「隼人・・・ありがとう」

磯貝が口を開く。

「ん、何が？」

「お前、さっき俺達の事を擁護してくれて・・・」

「礼を言われることじゃないさ。それに、仲良くしてくれるみんなの事を悪く言うのに少し腹が立ったからね～」

その後、クラスの雰囲気はさっきのムードから一変し、一気に和んだものへと戻った。

その中で、渚とカルマだけが釈然としない表情をしていたー。

五時間目の体育は射撃訓練だった。

みんなが烏間先生の指導を受けている時、三村が何かに気づいた。

「おいおい、マジか！二人が倉庫にしけ込んでくぜ！」

みんな振り返って、その姿を視認する。

「な～んか、がっかりだな～。殺せんせーあんな見え見えの女に引っかかって」

菅谷がぼやく。

「烏間先生、私達あの人のことを好きになれません」

片岡がみんなの気持ちを代弁する。

「すまない、プロの彼女に一任しろとの国の指示でな・・・だが、わずか一日で全ての準備を整える手際、殺し屋として一流なのは確かだろう」

烏間先生がすまなさそうに言う。

（まぁ、それはそうだが・・・果たしてどこまでやれるか・・・）

二人が倉庫に入って程なくして、けたたましい銃声が鳴り響いた。

（実弾を使ったのか!?あいつに実弾は効かないはずだが・・・はぁ、やはり俺の読みは当たったか・・・）

一時して銃声が鳴りやむと、今度はヌルヌル音とイリーナの嬌声が聞こえてきた。

（・・・何してんだよ、あのタコ）

「めっちゃ執拗にヌルヌルされているぞ！」

「行ってみようぜ！」

岡島と前原が真っ先に反応し、倉庫に駆けていった。

みんなも後を追うと、丁度倉庫からいつもと何ら変わりない殺せんせーが出てきた。

「殺せんせー！」

「おっぱいは!?」

（おい何てこと聞いてんだ岡島・・・）

「いやぁ～もう少し楽しみたかったですが、皆さんとの授業の方が楽しみですから」

「中で何があったんですか・・・？」

渚がそう言った時、倉庫から・・・昔ながらの体操服を着て、惚けた顔のイリーナが出てきた。

「・・・まさか・・・わずか一分であんなことされるなんて・・・肩と腰の凝りをほぐされて・・・オイルと小顔と琳派のマッサージもされて・・・早着替えさせられて・・・その上まさか・・・触手とヌルヌルで・・・あんなことを・・・」

そう言ってイリーナはその場でくずおれた。

（（（（どんなことだ!!!））））

「・・・殺せんせー何したの？」

渚が殺せんせーに聞くと、

「さあねぇ、大人には大人の手入れがありますから」

悪い大人の顔をして質問をはぐらかした。

「さぁ、教室に戻りますよ！」

「「「「は～い」」」」

殺せんせーに促され、みんなは教室に戻っていった。

みんなが去った後、俺はイリーナの下へ行った。

「・・・見事にしてやられたな」

「・・・何よ、冷やかしにでも来たの？」

「まぁ、そんなところだ」

「なっ・・・!?」

「まだガキの俺達の方が奴にダメージを与えられてたし、俺達は暗殺業の他に学業もこなしてるハンデ付きだぞ？」

「・・・何が言いたいの」

「クラスのみんなでもアンタは他の場所ではプロの殺し屋というのは分かる、それも一流の。だが、ここは〝暗殺教室〟だ。さっきも言っ

たが、ここでは暗殺者と教師を両立できない限り、ここでは最もプロとして〝劣っている〟」

「・・・くっ」

さっきの失敗の事もあってイリーナは悔しそうな表情を浮かべている。

「ここで暗殺を続けるなら、まずみんなに非礼を詫びろ。みんなの事を下として見ないことだ。納得いかないなら、あの男に相談したらどうだ？」

そう言うと俺は、後ろを顎でしゃくる。

イリーナは怪訝な表情で振り返ると・・・

「・・・イリーナ、久しぶりだな」

千賀が立っていた。

8話　再開の時間

五時間目の最中、職員室には、体操服から着替えたイリーナ、烏間先生、俺、そして千賀がいた。

・・・なんというか、空気が重い。

まぁ、面子が面子だからそれも仕方ないか。

なんせ現役の軍人三人（そのうち一人未成年）と殺し屋一人がいる状況なのだから。

「そうか、イリーナ先生と千賀先生は面識があったのか」

以外にも、自分のデスクで仕事をしていた烏間先生が口を開く。

「ああ、そうだ。イリーナと会ったのは東欧のスラム街だ。十年以上前だったかな・・・俺がまだ自衛隊に在籍していたころでなー」

千賀がそこまで言うと、イリーナの方をちらっと見る。

イリーナは千賀を少し睨みつけたが、少し間をおいて頷いた。

「当時、俺は自衛隊の立てた拠点で現地住民やスラム街の住民の診察や手当をしていた。その地域では政府軍と反政府軍による内戦の真っただ中でな。近くの街中で戦闘になることもしばしばあって、その度に住民達が巻き添えを食らってテントに運ばれてきたさ。その中の一人だったのが・・・イリーナだった」

ここまで聞いて俺は、イリーナ先生がとんでもなく壮絶な人生を歩んできたということを知り、さっきは強く言い過ぎたと後悔した。

今度は、イリーナ先生が自ら語りだす。

「私は・・・戦争孤児だったの。政府側だった両親は私の目の前で反政府軍の人間に・・・私も殺されそうになって・・・それで父親の銃を

手にして・・・殺した。その後、どうしたかは私も覚えていない。気が付いたら、自衛隊のテントにいて・・・その時に千賀と会ったの・・・」

先程までパソコンに向かっていた烏間先生も手を止め、黙ってイリーナ先生の話に耳を傾けている。

「千賀は・・・身寄りのない私を自分の娘のように育ててくれた。けど、私の頭から・・・戦争の記憶が離れることはなかった・・・目を見開いて死んだ両親の死体と床に広がる血の池・・・私が撃った銃の冷たさ・・・私はずっと怯えていた」

そこまで話すと、イリーナ先生は一つ、大きなため息をついた。

「その事を見抜いていた千賀が、ある日、私をある人に会わせてくれたの。それが私の〝暗殺者〟としての師匠・・・ロヴロ先生だった。千賀とロヴロ先生は私に〝死〟に怯えて生きるのではなく、〝死〟を飼いならすという道を与えてくれた。だから、今の私がある・・・ロヴロ先生にも、千賀・・・アンタにも感謝してるわ。だから、この暗殺を成功させて、恩返しがしたかったの・・・まぁ、まさかその相手がここにいるとは思わなかったけどね」

イリーナ先生は自虐的な笑みを浮かべる。

「イリーナ先生」

俺の呼びかけにイリーナ先生が俺の方へ振り返る。

「先程は、先生の事も知らずに失礼な発言を・・・すいません」

俺はイリーナ先生に深々と頭を下げた。

「・・・いいわ。アンタなら」

イリーナ先生は俺を許してくれた。

「そういえばイリーナ、さっきこっちに来るときに隼人から聞いたが、他の生徒達と上手くいってないみたいだな～」

千賀はニヤニヤしながら言う。

「ゲホッ!?」

唐突の千賀の問いかけに、丁度お茶を口に含んだところだったイリーナ先生は咽せてしまった。

「何よ!?せっかくいいムードになりそうだったのに!」

（・・・イリーナ先生もこの重い空気苦手だよね）

「まぁ、ただ俺も隼人と言うことは一緒だ。暗殺を続けてあのタコにさっきの借りを返したいならまず謝ってこい。うちのクラスでは、お前が暗殺で色んな人間を演じるように、彼らも生徒と暗殺者をきちんと両立している。普通そんなことできるガキなんていないさ。俺も、教師と暗殺者としてここにいるからみんなに授業は教えているが、みんな良い生徒だ」

イリーナ先生は黙って千賀の話を聞いている。

「それにイリーナ、この仕事はお前にとっても学ぶことが多い」

「・・・何を学ぶっていうの?」

「それはやっていくうちに分かるさ。だから、彼らと仲直りした上で、お前が磨いてきた英語のスキルを彼らに教えてやってはくれないか？」

少し沈黙の後、

「分かったわ、アンタが言うなら・・・」

「じゃあ、イリーナ先生行きましょうか」

「え!?ちょっと待って隼人！まだ心の準備が・・・」

「はいはいそういうのイイですから、みんな待ってますよ～」

子供みたいに抵抗するイリーナを俺は親のように引きずって教室へと向かった。

教室の前に来たと同時にチャイムが鳴った。殺せんせーが出てきた。

俺らを見て、何をするかは察したらしい。

俺はイリーナを教室に放り込んで、教室の扉を閉めた。

「なっ!?私一人で!?アンタいてくれないの？」

「お前のしたことになんでおれもいなきゃいけねぇんだよ、一人でやれ」

そう突き放してやると、隣で殺せんせーがそれでよかったとでも言いたげに僕に頷いた。

すると、イリーナも諦めたのか、教壇に立って・・・黒板に何か書

き始めた。
みんなも、イリーナ先生に注目する。
「Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｉｎｃｒｅｄｉｂｌｅ　ｉｎ　ｂｅｄ．Ｒｅｐｅａｔ！」
みんな突然の事に困惑するが、イリーナ先生の有無を言わさぬ口調にみんなも繰り返す。
（・・・中坊に何てこと教えてんだ）
英語がわかる俺は頭を抱えた。
「アメリカでとあるＶＩＰを暗殺した時、まずそいつのボディーガードに色仕掛けで接近したわ。その時彼が私に言った言葉よ。意味は・・・『ベッドでの君は・・・凄いよ』」
何人かが顔を赤くするのが見えたが、イリーナ先生は構わず続ける。
「外国語を短い時間で習得するには、その国の恋人を手っ取り早いとよく言われるわ。相手の気持ちをよく知りたいから、必死で言葉を理解しようとするのね。私は仕事上必要な時、そのやり方で新たな言語を身につけてきた。だから、私の授業では外国人の口説き方を教えてあげる。プロの暗殺者直伝の仲良くなる会話のコツ。身につければ実際に外国人と会った時に必ず役に立つわ。受験に必要な勉強なんてあのタコに教わりなさい。私が教えてあげられるのはあくまで実践的な会話術だけ。もし、それでもアンタ達が私を先生と思えなかったら、その時は暗殺を諦めて出ていくわ。・・・それなら文句ないでしょ？あと、悪かったわよ・・・色々」

一時の沈黙の後、みんなは笑いだした。

「何ビクビクしてんのさ～さっきまで殺すとか言ってたくせに」

「なんか、普通に先生になっちゃったな」

「もうビッチ姉さんなんて呼べないね～」

「考えてみれば先生に失礼な呼び方だったよね！」

「うん、呼び方変えないとね！」

どうやら、みんな受け入れてくれたようだ。
イリーナ先生も嬉しかったのか若干涙目になっている。

「じゃあビッチ先生で」

前原の一言にイリーナが凍り付く。
教室の外で俺は思わず吹いてしまった。

「えっと・・・折角だからビッチから離れてみない？ほら、気安くファーストネームで呼んでくれて構わないー」

「でもな～すっかりビッチで固定されちゃったし」

「え゛!?」

「うん！イリーナ先生よりビッチ先生の方がしっくりくるよー！」

「そんなわけで、よろしく～ビッチ先生！」

「よろしくな～ビッチ先生！」

「キーッ!!!!やっぱり嫌いよアンタ達!!!!」

なんだかんだで上手く馴染めたようだ。

「すっかり馴染んでますねぇ」

殺せんせーが俺に言う。

「ま、まぁ、一応な」

「やはり皆さんには生の外国人と会話させてあげたい。差し詰め、世界中を渡り歩いた殺し屋などは最適でしょう？」

「!?・・・まさか殺せんせーはそこまで見越して？」

「もちろんですよ、まさかイリーナ先生と千賀先生がお知り合いだとは知りませんでしたが」

そう言うと、殺せんせーは職員室へと戻っていった。

（・・・殺せんせーはどこまでも先生だな）

かくして、イリーナ先生はE組の先生になった。

「イリーナ、泊まるところないって？」

「え？ええ・・・まぁ」

「どうだ？ウチに来ないか？」

「はぁ!?なんでアンタんところに「嫌ならいいが」いや！お願いします!!」

「というわけで、イリーナは俺んところで生活することになったから」

「よろしくねぇ、隼人ぉ」

「・・・」

9話　奥田の時間

ある日の放課後、いつものように学校で一眠りしていた俺はいつものように目が覚め、いつものように帰路に就くところだった。
ただ、玄関を出ようとしたところで違和感に気づいた。
（・・・理科室の辺りに人の気配がする。殺せんせーや烏間先生のではないな・・・行ってみるか）
俺は、踵を返して理科室へ向かった。
理科室前の廊下の窓から中を伺うと・・・中にいたのは奥田だった。

「やぁ、奥田さん」

「きゃぁっ！隼人君・・・でしたっけ？ハァ・・・びっくりしました・・・」

「あ～驚かせちゃってごめんね～。理科室に人の気配がしたから来てみたんだけど、何してんの？」

「これですか？私、みんなみたいに不意討ちとか上手くできなくて・・・けど、化学が得意だから・・・殺せんせーに毒を試してみたくって・・・」

「それはいい考えだね！俺もなんか手伝おうか？」

「え、いいんですか？」

「もちろん！でも、せっかく毒を作るんだし、専門家を読んでもっと強力なものにしない？」

「専門家・・・ですか？」

「うんうん、すぐに来てくれる専門家だよ～」

そう言って俺は携帯を取り出し、電話をかけたー。

「「「「おお～！」」」」

みんなが感嘆する。

次の日の一時間目は、俺達は理科の授業でお菓子から着色料を取り出す実験をしていて、殺せんせーが教卓で実践していたところだった。

「はい、お菓子から着色料を取り出す実験は・・・」

殺せんせーはそう言った瞬間、マッハでみんなからお菓子を取り上げた。

「これで終了～。余ったお菓子は先生が回収しておきます」

「「「「え～～～～～～～!!!」」」」

「それ、俺達が買ったやつだぞ!!」」」」

してやったり顔の殺せんせーに杉野が吠える。

「給料日前だから授業でお菓子を調達してやがる・・・」

「地球を滅ぼす超生物が何で給料で暮らしてんのよ・・・」

みんなが口々にぼやく中、奥田がこちらに視線を送っていることに気づいた。

俺は、笑顔で頷いてみせた。

それを確認した奥田は、緊張した面持ちで殺せんせーのもとへ向か

う。
その手には、薬品の入った一本の試験管があった。
「あ、あの・・・先生」
「どうかしましたか、奥田さん」
「あの！毒です！飲んでください！」
みんな突然の事に驚くが、すぐに理解した。
「ストレートだなぁ・・・」
前原が苦笑する。
まぁ、俺もこんなストレートに行くとは思わなかったけど。
「だめ・・・ですか？」
「奥田さん、これはまた正直な暗殺ですねぇ」
「あの・・・あの、私、不意討ちとか上手くできなくて・・・でも化学なら得意なんで・・・隼人さんと千賀先生にも手伝ってもらって・・・真心込めて作ったんです」
「隼人君も手伝ったの？」
渚が聞いてくる。
「まぁな。昼寝してたら人助けをしろっていう御告げがあってだな～」

俺は軽口を叩く。

「でも奥田・・・それで渡して飲むバカは流石に・・・」

杉野がためらいがちに言う。

「それはそれは・・・では、頂きまーす」

殺せんせーは試験管のふたを開け、薬品を飲んだ。

みんなが息をのんで見守る。

「・・・ウグッ!?・・・これは・・・!」

殺せんせーが悶え始めた。

「効いてるのか!?」

「まさか!」

みんなが口々に言う中・・・悶える殺せんせーは・・・真顔になった。

「・・・真顔になった」

「てか先生真顔薄っす!」

「顔文字みてぇだな・・・」

みんな口々に言う。

「この味は青酸カリですね。人間が飲めば有害ですが、先生には効きません。先生の事は嫌いでも、暗殺の事は嫌いにならないで下さい」

「いきなりどうした!?」

殺せんせーのいきなりの某アイドルの発言を持ち出してきた先生に岡島がツッコミを入れる。

「そ、そうですか・・・」

暗殺が失敗したことに奥田が落ち込む。

俺が奥田に声をかけようとした時、

「この後時間があるのなら、一緒に先生を殺す毒薬を研究しましょう。せっかく手伝ったんですから隼人君も」

「!?いいんですか?」

「もちろん!丁度あなたの苦手強化の化学の克服も狙えますからねぇ」

「うぐっ・・・」

・・・痛いところを突いてきた。

人助けのつもりがまさか弱点克服を狙ってくるとは・・・してやられた。

かくして、その日の昼休みに俺と奥田は殺せんせーと薬品を作ることになった。

昼休みになり、みんなが校庭で暗殺バドミントンをしている中、俺

と奥田は理科室で殺せんせーの指導の下、毒薬づくりをしていた。

「では、奥田さんはそれをエタノールに投入しましょう。ああ、気体を吸わぬよう気を付けて」

「はい！」

「で、先生。俺は？」

「隼人君はできた固形物をこっちに持ってきてください」

「了解～」

殺せんせーの言われた通りに俺は奥田が調合した液体を蒸発させ、できた固形物を持ってきた。

「奥田さんは、理科の成績が素晴らしいんですけどねぇ」

殺せんせーが切り出す。

「ほんと羨ましいよ～俺、理系教科が苦手で・・・」

「へぇ～そうなんですか！何でもできるって思ってたから少し意外です」

「・・・あれ俺さっき暴露されたような～」

「ご、ごめんなさい。でも・・・私も理科以外はさっぱりで、E組に落とされるのも仕方ないです」

奥田さんの表情が暗くなる。

「特に・・・国語が・・・言葉の善し悪しとか、人間の複雑な感情表現とか、何が正解かわからなくて・・・でも、それで構いません。数式や化学式は絶対に正解が決まっているから。私には、気の利いた言葉遊びも、細かい心情を考える作業も、必要ないんです」

「奥田さん・・・」

それは違うと言いたいものの、いい言葉が見つからず口籠ってしまう。

「ふーん、そうですね。では、そんな奥田さんに先生から宿題をあげましょう」

殺せんせーはそう言うと、胸ポケットから一枚の紙を取り出す。

「何かのレシピですか?」

俺は殺せんせーに問うた。

「ええ、くれぐれも取り扱い注意ですよ?あと、千賀先生にもこのレシピは口外禁止です」

「あ、ああ。分かった」

(千賀にも黙っておけとは・・・なんかやばいレシピなんだろうか・・・)

そんな一抹の不安を抱えながら俺は殺せんせーに同意した。

「では、私は職員室に戻りますね。次の授業の準備をしなくては」

そう言って殺せんせーは理科室を後にした。

「いっちゃいましたね」

「そうだね～。ところで、それレシピ見てもいい？」

「え？ああ！ど、どうぞ」

俺は奥田さんからレシピを受け取り、ざっと目を通した。

「ふむふむ・・・アオダイショウの毒牙にコウモリの羽!?一体何を作らせてんだ・・・」

「きっとこれが先生に効く毒薬なんですよ！」

「そ、そうだな」

何か腑に落ちなかったが、考えても思い浮かびそうにないので一旦考えるのを止め、レシピの調達に・・・ん？待てよ。

コウモリの羽とかアオダイショウの毒牙とかこんなものどっから用意するんだ？

「あ、あの～・・・」

「ん、どうした？」

「こ、この注釈・・・」

さっき読んでる時には気づかなかった、レシピに小さい字で書かれていた注釈を指さす奥田の声が震えている。

そこには、『なお、薬品以外のものについては、隼人君、出番ですよ

！』と書かれていた。

「あ～、なるほどね。後であのタコ絶対にぶっ殺す」

「すいません！私も手伝いに・・・」

「いや、これは奥田さんのせいじゃないし、それにこのミッションは少し危ないからサバイバル経験のある俺に任せたんだと思う。だから奥田さんは気にせずに待っててよ」

奥田は申し訳なさそうに頷く。

というわけで、俺は放課後に裏山に材料調達に行くことになった。

学校が終わり、山に入ってから数時間して、俺は毒牙と羽をアンプルに入れ山から下りた。

玄関では奥田が待っていてくれた。

「隼人君！」

「ほら、レシピの品だ」

俺は、アンプルを手渡す。

「ごめんなさい！私の為に付き合ってくれて・・・」

奥田が謝る。

「謝る必要ないって！俺も好きでやってるからさ」

「ありがとう！じゃあ、さっそく作ってきますね！」

そう言うと、奥田は笑顔で理科室へ駆けて行った。

「あ～疲れた。帰って寝るか・・・」

俺は放課後の昼寝をせずに、這う這うの体で帰路に就いた。

「で・・・その毒薬を持って来いって言われたんだ・・・」

「はい！理論上はこれが一番効果があるって！」

次の日の朝、奥田は完成した薬品を教室に持ってきていた。
茅野と渚がご丁寧にレシピまでつけてくれてることに感心する中、

「自分を殺す毒薬かぁ・・・何考えてんだ？」

杉野が疑問を口にする。

「きっと、私を応援してくれてるんです！国語なんて分からなくても、私の長所を伸ばせばいいって！」

（殺せんせーが一つの事に特化させるなんてことするかなぁ・・・まさか）

その時、俺は頭の中で一つの可能性を思いついた。
それを口にする前に、殺せんせーが教室に入ってきた。

「はい皆さん、席についてください」

「殺せんせー来たよ、渡してくれれば？」

茅野が奥田を促す。
奥田は頷いてまっすぐ殺せんせーのもとへ歩いて行った。
「先生!これ!」
「おや、流石です。では早速頂きます」
殺せんせーは躊躇いもなく薬品を口に流し込んだ。
そこで俺は確信した。
(あれは毒じゃない・・・何かの強化剤だ!)
その時には、時すでに遅し。
殺せんせーの体が赤く光りだし、何か大きな変化が起ころうとしていた。
「ありがとう奥田さん、君の薬のおかげで先生は新たなステージへ進めそうです」
「それって・・・どういう・・・?」
奥田はどういう事か分からず困惑している。
殺せんせーは大きな雄たけびを上げると・・・溶けた。
「ふぅ〜」
「「「「溶けた!?」」」」
「先生、どういうことか説明してもらおうか」

俺が殺せんせーを問いただす。

「奥田さんに作ってもらったのはねぇ、先生の細胞を活性化させて流動性を増す薬なのです。液状なのでどんな隙間にも入り込むことが可能に」

そう言う殺せんせーはなぜか片岡さんの机の中にいた。

「何処に入ってんのよ・・・」

片岡さんが至極当然の反応を返す。

「しかもスピードはそのままに!さぁ、殺ってみなさい!!」

そう言うと殺せんせーは液状のまま教室を飛び回った。

悲鳴の他にはぐれ先生とかいう少しアブない発言も飛び交う中、

「奥田さん、あの毒薬って!?」

茅野が奥田に問いかける。

「殺せんせー、〝わざと〟奥田さんを騙したんだね」

「騙したって・・・ホントですか殺せんせー?」

奥田が信じられない様子で殺せんせーに聞いた。

「ええ、奥田さん。暗殺には人を騙す国語力も必要ですよ?」

教室の隅にへばりついている殺せんせーは言った。

「え・・・？」

「国語・・・力？」

奥田と渚が聞き返す。

「どんなに優れた毒を作れても、今回のように馬鹿正直に渡したのではターゲットに利用されて終わりです。隼人君、君が先生に毒を盛るならどうしますか？」

「うーん、俺なら香りの強いコーヒーで毒を割って、甘いケーキと一緒にいつものお礼って言って渡すかな」

「そう、人を騙すには相手の気持ちを知る必要がある。言葉に工夫をする必要がある。上手な毒の盛り方、それに必要なのが国語です」

奥田と、渚がハッとなる。

「君の理科の才能は将来みんなの役に立てられます。それを多くの人に分かりやすく伝えるために、毒を渡す国語力も鍛えてください」

殺せんせーは元の形に戻りながら奥田さんに諭す。

「はいっ！」

奥田さんも、納得したのか笑顔で返事をする。

みんなも、苦笑しながら状況を理解する。

（殺せんせーはわざとこの状況を作り出して、理解させようとしたのか・・・先生はどこまでも先生だな）

俺は内心でつぶやく。

「みんなやっぱり暗殺以前の問題だねぇ」

カルマが笑いながら言う。

まぁ、確かにごもっともなことだ。

これで、一件落着・・・あれ？奥田はこれで学べたけど・・・俺の山に入った苦労は・・・

「ねぇ、殺せんせー」

「にゅや？なんでしょう隼人君」

「俺がわざわざ山に入ってアオダイショウと格闘したりコウモリ叩き落として俺は化学を学べたのかな・・・？」

「にゅや!?・・・ヒュ～ヒュ～」

先生がすっとぼけるのを見てカチンときた。

「ぶっ殺す」

俺は、殺意を込めたナイフを一閃させた。

殺せんせーはすっ飛んで逃げたが、床には切れた先生の触手が一本蠢いていた。

「すげぇ・・・触手一本タイマンで切りやがった」

「流石軍人だね～」

みんなにチヤホヤされる中、渚とカルマだけが顔を見合わせていたのだった。

１０話　集会の時間

「急げ、遅れてたらまたどんな嫌がらせされるか分かんないぞ」

クラスの先頭を歩く磯貝が急かす。

「前は本校舎の花壇掃除だったっけ？」

「あれはきつかった～花壇が広すぎんだよ」

「お前はほとんどサボってただろ～？」

ちゃっかり岡野に同意する前原に磯貝がツッコむ。

「はっはーっ、そうだっけ？」

「あーもう、何で私達だけこんな思いしなきゃいけないの～！」

すっとぼける前原を他所に、岡野が空に叫ぶ。

・・・なんか、カオスな情況だ。

俺達Ｅ組の校舎は本校舎裏にある山の上に立っているため、全校集会の際は昼休みを返上して山を下って本校舎に行かなければならないそうだ。

また、その山道も自然のトラップがいっぱいな訳で・・・

架かっている橋が崩れたり・・・

「岡島～～～～～～!!!」

蛇に絡まれたり・・・

「「岡島君～～～～～～!!!」

落石に遭ったり・・・

「「「お、岡島～～～～～～!!!」」」

蜂の大軍が襲って来たり・・・

「「「「お、岡島～～～～～～!!!」」」」

・・・まぁ大半のトラップは岡島が全て引き受けてくれたおかげで難なく進めそうだ。

奴の冥福を祈ろう。

「死んでねぇよ!!!ハァ、ハァ、ハァ」

中間地点に到達した俺達は休憩を入れた。

岡島はもちろんだが、みんなの息もかなり上がっていた。

俺もほんの少しだけ肩で息を切らしていた。

「大丈夫か?」

一足先に到着していた烏間先生が俺達を気遣う。

「烏間先生!」

「焦らなくていい。今のペースなら十分間に合う」

てか、この山道をこのスピードで下ってもいつも通りの烏間先生なのを見て、烏間先生はやっぱり精鋭の軍人なんだなという事を思い知らされる。

「ちょっとぉ～～～～～アンタ達ぃ～～～～～～～!!」

山の上の方から声が聞こえる。

「あ、ビッチ先生!」

「ハァ、ハァ、休憩時間から移動なんて聞いてないわよ、ハァ」

全速力で来たのか完全に息が上がって、地面にへばっていた。

「だらしねぇな～ビッチ先生」

杉野が苦笑する。

「ヒールで走ると倍疲れるのよ!!」

「何でヒールで来たの!?そりゃ疲れるわ!!」

俺がツッコむ。

「烏間先生、殺せんせーと千賀先生は?」

殺せんせーがいないことに気づいた渚が烏間先生に尋ねる。

「千賀は先程用があると言って首相官邸に行った。奴は生徒たちの前に姿を曝すわけにはいかないからな。旧校舎に待機させている」

なるほど。普通に先生が国家機密って忘れてたわ。

「さぁ、本校舎までもう少しだ。行くぞ」

烏間先生に促されてみんなは再び移動を始めた。

本校舎に着いた時には、俺以外の全員の息は完全に上がり、地面にへばっていた。

まぁ、俺もかなり息は上がっていたが。

「ほらみんな、急いで整列しようぜ！」

いち早く息を整えた磯貝がみんなを促す。

「おい、赤城隼人はどいつだ」

突然誰かが俺を呼ぶ声がして振り返ると、そこにいたのは・・・椚ヶ丘中学校生徒会長にして理事長浅野學峯の一人息子、Ａ組の浅野学秀だった。

突然の人物の登場にみんなも驚く。

「俺だが・・・何か用か？」

「お前は集会に参加しなくていい。代わりに、理事長が君をお呼びだ」

「・・・分かった（あの男、何考えてる・・・）」

「ほかの奴らは、いつもの如くさっさと整列を済ませておくことだ」

そう言い残して浅野は去っていった。

「ちぇ、嫌な奴」

「てか、理事長に呼び出しとかお前何したんだ!?」

杉野が俺に聞いてくる。

「さぁな、悪いことはした覚えないんだけどなぁ・・・まぁ行ってくるさ」

そう言って俺はみんなのもとを離れ、理事長室へと向かった。

「・・・失礼します」

「やぁ、隼人君。元気そうだね。暗殺は上手くいってるかな?」

「・・・まずまずと言ったところです」

理事長室に入ると、浅野理事長がいつもの黒い笑顔で俺を迎える。

俺は理事長に促され、対面式ソファーに腰掛けた。

「で、何か御用でしょうか」

「君はE組への転校生だが、同時に国からの客人でもあるからね。E組の待遇を受けさせるのは無礼に当たると思ってね。モニターは用意しているから、ここで見ていくといい」

「・・・そんなお気遣いなさらなくて結構ですのに」

俺は理事長の表情を伺いながら言葉を返す。

「私もそうしたいところだが、国が業務停止命令を出すと脅してきたものだから仕方がないのだよ」

・・・本心モロに出てるじゃねえか。
しかしまさか、国が庇っているとは思ってなかった。
恐らく、この学校のE組のシステムを知っていた上で、ネメシスの一員を侮辱するようなことがあれば、うちのボスが日本を滅ぼしかねないとでも思ったのだろう。
それに、理事長も業務停止を言い渡されては流石に困るのだろう。
珍しく、彼の発する言葉に苛立ちが感じられる。

モニターに視線を移すと、体育館を俯瞰した映像が映し出されていた。
他のクラスの連中がバラバラにおしゃべりをする中、E組だけが整列していた。

「・・・これは」

「規律を守るために、E組は他のクラスよりも先に並ばなければいけないのだよ」

「話には聞いていましたが・・・」

なかなか酷い光景である。他クラスの連中が、整列しているE組を蔑んでいるのだ。
それは、集会が始まってからも同じ事だった。
校長の話にもE組を蔑むような発言が見受けられ、他クラスの連中が爆笑しているのである。
そこで、俺はE組の列にカルマがいないことに気づく。

「赤羽君はバックレたようだね。まぁ彼には十分な罰則を与えたので今回は見逃してあげよう」

「・・・だからちゃっかり私の思考読むのやめてください」

俺は理事長に反発する。

校長の話が終わり、生徒会が発表の準備に入った時、モニターの端の方に烏間先生が映った。

他クラスの教員に挨拶をしているようだ。

体育館がざわめきだしたー特に女子列が。

まぁ、烏間先生は確かにカッコいいが、ここまで反応するとは・・・この学校の男子はあまり恵まれていないのだろうか。

突如、烏間先生がE組列にすっ飛んでいった。その先にはデコったナイフケースを見せ合う中村と倉橋がいた。

てか、この前してあげた時よりさらにデコレーションしてる・・・。

烏間先生は凄まじい形相でそれを直させた。

・・・先生も大変だなぁ。

さらに、体育館にどよめきが起こる。

モニターを見ると、全校生徒の視線が体育館に集中していた。

視線を追っていくと・・・イリーナ先生がいた。

・・・あれは文句なしで美人だからああなるな。

てか、さっきまでへばってたのに凛として歩いているし。

(彼女、見栄っ張りなんだろうな〜)

俺は心の中でつぶやく。

イリーナ先生が渚に近づき、何かを言っている。

そして・・・自分のおっぱいに渚を埋もれさせていた。

(何してんだイリーナ先生・・・)

烏間先生がすぐに引き離すが、他クラスの男子が羨ましそうに見て

いたのは言うまでもない。
そうこうしている内に準備が終わり、生徒にプリントが配られる・・・が、E組には届いていない。
磯貝が尋ねると、プリントを忘れたから記憶して帰れと言い出した。
恐らくこれもわざとなのだろう。
全くどこまで陰湿なんだと思っていると・・・いつの間にかみんなの手にはプリントがあった。
そして、体育館の隅になんとE組校舎にいる筈の殺せんせーがいた。
変装のつもりなのか、白い手袋をつけ、皮膚の色も若干人間の肌に寄せてある。

（・・・随分と無茶をしやがる）

幸いにも、他クラスの連中は殺せんせーのの正体に気づいていないようだから集会はそのまま続いた。
が、隅でイリーナ先生が殺せんせーをナイフで攻撃し始めたのにはヒヤリとした。
速攻で烏間先生に腕を捻られて連行されていったが、E組に笑いが起こったのを見て、俺は少し安心した。

「・・・」

ふと視線を移すと、モニターを見ていた理事長の表情が険しくなる。
このことを快く思っていないのは、明白である。
その後は特に何も起こることはなく集会は終わり、俺も解放された。

理事長室を出てE組校舎へ戻る途中、自販機の前で渚が他クラスの連中に絡まれてるのが見えた。
その手前には烏間先生と殺せんせーがいた。
どうやら、烏間先生が止めに入ろうとするのを殺せんせーが制止したらしい。
しかし・・・なぜ・・・

その瞬間、渚は・・・殺気を纏っていた。
それも、俺が思わず身構えてしまうほど強力な殺気を、あの気弱そうな渚が放ったのである。
理解が追い付かず呆然としていると、渚がこちらに気づき、同じく動けない他クラスの連中を無視して走って向かってくる。

「お待たせ隼人君、戻ろっか」

渚がいつもの笑みを浮かべて言う。

「あ、ああ。」

俺は釈然としないまま返事を返し、一緒に山を登るのだった。

集会の後の授業では特に変わったことは何もなく、いつも通りの放課後を迎えた。
が、俺がいつものように昼寝に入ろうとすると、

「ねぇ、隼人君。ちょっといい?」

渚が話しかけてきた。傍にはカルマもいた。

「ああ、二人揃ってどうした?」

渚は一瞬口ごもったが、

「・・・ビッチ先生と二人きりで話してた時とか～殺せんせーの触手切った時に隼人君から凄い殺気を感じ取れたんだよね～みんな気づいてないけど」

カルマが説明する。

「ひょっとして、周囲にいる全員じゃなくて対象だけに殺気を当てるってことができるの？」

渚が真面目な顔で聞いてくる。

突然の質問に驚いたが、二人から何かしらの悪意は感じられないし、興味を持っただけなのだろうと判断した俺は、

「ああ、そうだ。ウチのボスから教わったんだ」

そう答えた。

「へぇ～ワ○ピースの覇王色の覇気みたいなことできるんだ～」

（発言がアブナイ・・・てか、もはや隠れてねぇ・・・）

「そういえば、渚も集会の後に他のクラスの連中に殺気を放ってたじゃん」

俺は思い出したように渚に言う。

「え？ああ！あれは・・・その・・・殺すって言われたから・・・ちょっと反論しただけなんだけどね」

「いやいやいやいや、そのレベルの殺気じゃなかったって！」

「へぇ～渚君が殺気か～」

「それからかってるよねカルマ君!?」

まぁ、普段の渚君からすればカルマの反応もおかしくない。

だが・・・あれは育てたら伸びそうだな・・・。

「ねぇ、渚」

「うん？どうしたの？」

「その殺気、伸ばしてみないか？」

「え？それって・・・どういう・・・？」

「俺みたいに対象だけに効力を発揮したり、一部に集中させるみたいな使い方は暗殺にとても有効になるのはお前も見たろ？だから、あれ程の殺気を放てる渚なら鍛えれば俺ぐらい扱えるかもね～」

「えーと、隼人君が教えてくれるってこと？」

「そういうことー」

「いいじゃ～ん、渚教えてもらいなって」

珍しくカルマが渚の背中を押す。

「え、えーと・・・じゃあ、よろしくね？」

渚がぎこちなく言う。

「ああ、今日はしないけど、おいおい日付を決めてしようか」

「うん！」

これが後のストーリーに大きく影響するのはまた別の話である。

11話　テストの時間

「さて、皆さん。「「「「始めましょうか!!」」」」」

「「「「いや、何を?」」」」」

殺せんせーに俺達がドン引きする。

というのも、殺せんせーはマッハで残像による分身を大量に作ってそれぞれの机の前に立っているのである。

「学校の中間テストが迫ってきました「そうそう」そんなわけでこの時間は「「「「高速教科テスト勉強を行います!!」」」」」

・・・何でもありだなその速度。

「先生の分身が一人ずつマンツーマンで「それぞれの苦手科目を徹底して復習します」」

「下らねぇ、ご丁寧に教科別にハチマキとか」

そう言う寺坂の前にも殺せんせーが付くが・・・

「つーかなんで俺だけナルトなんだよ!!」

「寺坂君は苦手強化が複数あるので」

「ちゃんと猫髭までつけてるし・・・」

不破さんが殺せんせーの細かさに感心していた。

俺の苦手教科は言わずもがな理系教科、数学はまだなんとかなるが、理科が厳しい。
殺せんせーに教えてもらいながら問題演習を進めていくと・・・

「ニュヤっ!?」

・・・殺せんせーの顔面がいびつな形になっていた。

「「「「急に暗殺しないでくださいカルマ君!それ避けると残像が全部乱れるんです!」」」」

「以外と繊細なんだこの分身・・・でも先生、こんなに分身して体力持つの?」

渚が殺せんせーに聞く。

「ご心配なく、一体は外で休憩させてますから」

「それむしろ疲れない!?」

俺と渚が見事にハモる。

そんなこんなで、勉強は進んでいき、俺も殺せんせーのおかげで大体の事は理解ができた。

「流石隼人君!ココの理解も速いですねぇ~千賀先生に教わっただけはありますねぇ~」

「!?なぜそれを・・・」

「千賀先生から理科の教材の相談を受けまして」

「千賀が・・・そこまでしてたのか・・・」

最近、自宅で寝る前とかに理科を教えてもらっていたのだが、そこまで考えているとは思ってなかった。

「これで呼び捨てできなくなりましたねぇ～」

殺せんせーがニヤニヤしながら言う。

「まあね。けど、あいつもそれはそれでくすぐったいだろうから、今まで通り呼び捨てさせてもらうさ」

満点の理科の演習プリントと一緒に殺せんせーにそう返した。

殺せんせーは満足げに頷いた。

そのほかのみんなも順調に勉強を進めていったようだ。

俺は勉強に没頭した。

放課後になり、みんなが帰宅する中で俺、渚、茅野、杉野は掃除をしていた。E組で掃除は当番制になっていて、放課後に当番になった班が掃除をして帰るという決まりだ。

「今日の殺せんせー凄かったねー！」

「うん！以前なら分身は四、五体が限界だったのにねー」

「そんなに気合い入れてどーすんのかねぇ」

「まぁそれはそれでいいんじゃない、プラスになるし」

今日の事を話している内に掃除は終わり、挨拶をして解散した。
椅子に座った俺は今日も一眠り・・・と言いたいところだが、職員室辺りから感じる黒いオーラで眠ろうにも眠れない。
しかも、このオーラを出す人物などあの教師を除いていないだろう。
俺は席を立ち、職員室へと向かった。

職員室の扉の前にはすでに渚が聞き耳を立てていた。
渚がこちらに気づいたようで、職員室の方を指差し、何か訴えている。
俺はサムズアップで返し、渚の後ろにピッタリと付いて中を覗き見る。
中にいたのは、烏間先生、イリーナ先生、千賀、そして・・・理事長だった。
何か話をしているようだった。

「まぁ、私には全て理解できる程の学は無いのですが、なんとも悲しいお方ですね。世界を救う救世主となるつもりが、世界を滅ぼす巨悪と成り果ててしまうとは」

（救う・・・滅ぼす・・・反物質の事か？）

俺は思考を巡らせながら話を聞く。

「いや、それをここでどうこう言うつもりはありません。私ごときがどうあがこうが、地球の危機は救えませんし。余程の事がない限り、私は暗殺にノータッチです・・・十分な口止め料もいただいてますし」

「・・・助かってます」

烏間先生が建前上の感謝を述べる。

「随分と割り切っておられるのね。嫌いじゃないわ、そういう男性」

イリーナ先生が探りを入れているようだ。

「光栄です」

そう言って理事長は殺せんせーの方に向き直ってしまった。

美女とは言えど流石に理事長には効かなかったようだ。

「しかしだ、この学園の長である私が考えなくてはならないのは、地球が来年以降も生き延びる場合、つまり、仮に誰かが貴方を殺せた場合の学校の未来です。率直に言えば、ここＥ組はこのままでなくては困ります」

「このままと言いますと、成績も待遇も最底辺という今の状態を？」

「はい。働きアリの法則を知っていますか？どんな集団でも２０％は怠け、２０％は働き、残り６０％は平均的になる法則。私が目指すのは、５％の怠けものと９５％の働き者の集団です。Ｅ組のようにはなりたくない、Ｅ組には行きたくない。９５％の生徒がそう強く思う事でこの理想的な比率は達成できる」

俺は悪寒が走った。

確かに合理的であるし、実際戦場でもこの現象はよく見られるものである。

ただ、まだ未熟な中学生に行うものでは決してない。

「・・・それで５％のＥ組は弱く惨めでなくては困る、と」

「今日D組の担任から苦情が来まして、ウチの生徒がE組から凄い目で睨まれた、殺すぞと脅されたとも」

俺は、ちょっと前に渚が放った殺気の事を思い出した。

それにしても随分と誇張されてるなぁ・・・。

渚を見ると、渚も苦笑するしかなかったようだ。

「暗殺をしているのだからそんな目つきも身に付くでしょう。それはそれで結構。問題は、成績底辺の生徒が一般の生徒に逆らう事。それは私の方針では許されない」

その瞬間、理事長は、渚はおろか、俺の殺気よりも強力なオーラを発した。

俺は咄嗟に飛び退いたが、渚はもろに受けてしまって体が硬直していた。

「以後慎むよう厳しく伝えてください」

そう言って、席を立った理事長がふと振り返り、

「そうだ、殺せんせー。一秒以内に解いてください」

そういって放り投げたのは・・・知恵の輪だった。

「え!?あ!?いきなりぃ~!!」

・・・完全にテンパった先生は知恵の輪で地面にのたうち回るザマだ。

「噂通りスピードはすごいですね。確かにこれならどんな暗殺だって躱せそうだ。でもね殺せんせー。この世の中には、スピードで解決で

きない問題もあるんですよ」

地面にへばっている殺せんせーに理事長は見下しながら言う。

「では、私はこの辺で」

理事長が歩いてきたから俺は、まださっきの影響で自力で立てない渚を支え、俺の後ろに立たせた。

理事長が出てきて、こちらに気づいた。

「おや、隼人君じゃないか。中間テストは期待しているよ、頑張りなさい」

いつもの乾いた笑みを俺に向ける。

「ええ、頑張らせてもらいます」

俺は警戒しながら言葉を返す。

理事長はその場を後にした。

去り際の一瞬、いつものどす黒いオーラの顔が見えた。

・・・やはりあの男は恐ろしい。

「渚、大丈夫?」

ようやく回復した渚に俺は声をかける。

「あ、うん・・・。ありがとう」

「にしても、随分と殺せんせーもしてやられたね・・・」

「そ、そうだね・・・」

俺と渚は苦笑する。

「明日の勉強会はもっと大変になりそうだな・・・」

「僕もそんな気がするよ・・・」

翌日・・・

「おはようございます、皆さん」

俺と渚の思った通り、殺せんせーは相当気合が入っているようで・・・さらに分身を増やしていた。

「「「「先生今日はさらに頑張って増えてみました」」」」

(頑張る方向がおかしいだろ・・・)

(いや、増えすぎだろ・・・)

俺と渚は心の中でつぶやく。

「「「「さぁ、授業開始です!!」」」」

まぁ、始まったのはいいが・・・なんか残像が雑と言うか・・・ゴ○ウとかト○コとか両○とかいるし・・・もはや別キャラに・・・

「どうしたの殺せんせー?なんか気合い入り過ぎじゃない?」

昨日の事情を知らない茅野が聞く。

「ん?・そんなことないですよ」

殺せんせーは平然と返しているが、おそらく心の中ではあの人への復讐で頭がいっぱいだろう。

まぁ、それを言うのも野暮だから今はおとなしく勉強に集中しよう。

俺は勉強に没頭した。

昼休みになり、しっかりと最後まで教え上げた殺せんせーは教卓で団扇を仰いで完全にバテていた。

「流石に相当疲れたみたいだな～」

「今ならやれるかなぁ～」

確かにそうだが・・・中村、ゲスイぞ。

「何でここまで一生懸命先生をすんのかねぇ・・・」

岡島が珍しく至極真っ当なことを言う。

「ヌルフッフッフッフッ、全ては君たちのテストの点を上げるためです。そうすれば・・・」

(((((・・・あのタコ、なにか良からぬことを企んでいるな)))))

みんながそう思った。

「いや、勉強の方はそれなりで良いよな～」

「うん、なんだって暗殺すれば賞金百億だし」
「百億あれば成績悪くてもその後の人生バラ色だしね」
俺はそんなことはないと言おうとしたが、その後の言葉が見つからず口籠ってしまう。
「にゅやっ、そ、そういう考え方をしますか!?」
「俺達、エンドのE組だぜ、殺せんせー」
「テストなんかより暗殺の方がよほど身近なチャンスなんだよ」
そう三村が言った時、教室の空気が変わった。
「なるほど、よく分かりました。今の君達には暗殺者の資格がありませんねぇ・・・全員校庭へ出なさい」
そう言う殺せんせーは・・・怒っていた。

校庭に出たみんなは、急に殺せんせーが怒った原因が分かっていないようで困惑していた。
校庭には事情を知らない烏間先生とイリーナ先生、そして千賀も呼ばれた。
事情を含め、殺せんせーの怒りの原因が分かるのは俺と、みんなとは離れて様子を見ているカルマだけのようだ。
「E組のシステムの上手い所は一応の救済措置が用意されている点だ。定期テストで学年186人中50位に入り、尚且つ元の担任がク

ラス復帰を許可すれば差別されたこのE組から抜け出せる。だが、もともと成績最下位な上、この劣悪な学習環境ではその条件を満たすのは難しすぎる。殆どのE組生徒は救済の手すら掴めない負い目から、えぐいさべうも受け入れてしまうそうだ」

殺せんせーは校庭の真ん中にあった朝礼台を端に寄せながら、淡々とみんなに言う。

「何なのよ、急に来いって」

イリーナ先生が校舎から出てくる。

「イリーナ先生、プロの殺し屋として伺いますが」

「・・・何よいきなり」

「貴方はいつも仕事をする時、用意するプランは一つですか？」

イリーナは一瞬戸惑ったが、

「いいえ、本命のプランなんて思った通り行くことの方が少ないわ。不測の事態に備えて予備のプランをより綿密に作っておくのが暗殺の基本よ」

そうすぐに答える。

「では次に烏間先生」

「・・・？」

「ナイフ術を生徒に教える時、重要なのは第一撃だけですか？

「・・・第一撃はもちろん最重要だが、次の動きも大切だ。強敵相手では第一撃は高確率で躱される。その後の第二撃、第三撃をいかに高精度に繰り出すかが勝敗を分ける」

「では、千賀先生」

「何だ？」

「千賀先生や隼人君の部隊では任務の時、一人が一つの役割だけに徹しますか？」

「いいや、違うね。確かにウチはメンバー全員が格闘とか狙撃とか機械とか何かしらのエキスパートだ。だが、いつも全員一緒に出撃するわけじゃないから、誰かが欠けても任務を全うできるように全員がエキスパートとはいかないまでも、各分野をかなりの練度で習得している」

「最後に、隼人君」

「・・・はい」

「君はいろんな分野の知識や言語を知っていますね。実際に役に立ちましたか？」

「ああ。・・・俺が社会に出た時、様々な言語や知識ってのは大きな武器になった。実際に、俺は見知らぬ戦場に放置されたことがあったが、その知識のおかげで生還することができた」

俺の経験談に驚きはするが、みんなの表情を見ると話の核心には辿り着けていないようだ。

「結局何が言いたいんだよ～」

前原が殺せんせーに尋ねる。

「先生方や隼人君が言うように、自信を持てる次の手があるから、自信に満ちた暗殺者になれる。対して君達はどうでしょう。俺達には暗殺があるからいいやと考えて、勉強の目標を低くしている。それは、劣等感の原因から目を背けているだけです」

殺せんせーはその場で高速回転し始め、俺達は先生の巻き起こす砂埃を咄嗟に腕で遮る。

「もし先生がこの教室から逃げたなら?もし他の殺し屋が先に先生を殺したら?暗殺という拠り所を失った君達には、E組の劣等感しか残らない。そんな危うい君達に、先生からのアドバイスです」

先生はさらに回転を速め、天にまで上る巨大な竜巻を巻き上げた。

「第二の刃を持たざる者は・・・暗殺社の資格なし!!」

巨大な竜巻は校庭の草木を根こそぎ巻き込み、地面を均していく。

竜巻が消え、砂埃が晴れた頃には・・・

「・・・校庭に雑草や凸凹が多かったのでね、手入れしました」

校庭は綺麗に整地され、サッカーゴールから、トラックのラインまでご丁寧に引いてあった。

「先生は地球を消せる超生物、この一帯を平らにする事等容易い事で

す」

この時、俺達全員が殺せんせーは本当に地球を消す超生物である事を嫌でも再認識せざるを得なかった。

「もしも君達が、自信を持てる第二の刃を示せなければ、先生の相手に値する暗殺者はこの教室にはいないと見なし、校舎ごと平らにして先生は去ります」

（また・・・大きく出たな・・・）

俺は心の中でつぶやく。

「第二の刃・・・いつまでに？」

渚が殺せんせーに聞く。

「決まっています、明日です。明日の中間テスト、クラス全員５０位以内をとりなさい」

「「「「「えええええ!!!!」」」」」

俺達全員が声を上げて驚く。

「君たちの第二の刃は先生が既に育てています、本校舎の教師に劣る程、先生はトロイ教え方をしていません。自信をもってその刃を振るってきなさい。恥じる事なく笑顔で胸を張るのです、自分たちがアサシンであり、E組である事に」

全員がそのアドバイスを飲み込むのには、少し長い間が必要だった。

「それにしても、今日の竜巻凄かったな～」

千賀が自作のカレーライスを頬張りながら言う。

「ちょっと!食べながら喋るなんて行儀が悪いわよ」

イリーナ先生が千賀に説教する。

「まぁ、確かにあれは理事長も仰天しただろうな」

そう言ってから、俺はスプーンを口に運ぶ。

「けど、あのタコは本気なのかしら?こないだまで成績は底辺だったんでしょあの子達」

イリーナ先生が疑問を口にする。

「みんなの過去の事はよく知らない。けど、実際俺が教えてもらった限りでは、間違いなくみんなの刃は成長してると思う」

「ふ～ん、そう」

イリーナ先生は納得したようだ。

・・・おっと、電話だ。

「はい、もしもし」

「あら隼人、元気そうじゃない」

電話をかけてきたのはミレーナだった。

「なんだミレーナか・・・」

「何よ、私じゃ不満？」

「そんなんじゃねぇよ、で、何の用だ？」

「中間テスト、明日らしいわね」

「何故それを!?」

「千賀から聞いたのよ。で、ボスに言ったら『上位に入ってなかったら減給』だと伝えてくれって」

「何で余計な事言ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

「あら、そんなに喜ばなくても「喜んでねぇよ!!!!!」まぁ、そういう事だから、頑張ってね♡」

「あ!おい!?・・・切られた」

「ア、アンタも大変なのね・・・」

イリーナ先生が同情してくれる。

「・・・おい千賀。何でミレーナに言った？」

「・・・」

その後、マンションの一室が戦場と化したのは言うまでもなく、次

の日登校したイリーナには、目の下に隈ができていた。

１２話　結果の時間

今日はいよいよ中間テストの日だ。
中間テストは本校舎で行われるため、今日は全員本校舎への登校となる。

「おはよう、隼人君」

「おはよー隼人君」

E組の試験会場になっている教室には、一足先に着いた渚と茅野がいた。

「おはよう、二人共。今日は頑張ろっか」

「「う、うん！」」

二人は若干強張りながらも笑顔で返す。
まぁ、昨日の事もあるから無理はない。
俺もその理由とは別に給料がかかっている、頑張らなければ。

程なくして全員が集合し、試験官が教室に入ってきて問題を配布し始めた。
カルマと俺以外のみんなが緊張した面持ちでいる。
やはり、みんなも昨日の事があったからだろう。
しかし、ここまで来たならやるしかない。

「始め！」

試験官の合図とともに試験が始まったー。

テスト明けの次の日、教室には重苦しい雰囲気が漂っていた。
みんなはおろか、殺せんせーでさえ暗い表情をしていた。
落ち込むみんなの手には・・・燦燦たる結果のテストがあった。
聞くところによると、直前で全教科においてテスト範囲の変更を行い、その事をE組にだけ通達しなかったらしい。
烏間先生が先程本校舎に抗議したが、しらばっくれているそうだ。

(道理で問題が聞いていたところと違うわけだ・・・理事長め、どうしてくれる・・・)

俺は理事長に対する凄まじい殺意の念が沸いた。
だが、今はそれよりみんなだ。
全員が先生との約束を守れなかった事、そして、自身がやっぱりエンドのE組であるという事を・・・

「・・・先生の責任です。この学校の仕組みを甘く見過ぎていたようです。君達に顔向けできません」

殺せんせーも、自身のせいでこのような状況になった事にひどく落ち込んでいるようだ。
それは違うと俺が言おうとした時、殺せんせーに向かって一本のナイフが飛んだ。

「ニュヤっ!?」

黒板の方を向いていた殺せんせーは背後から突如飛んできたナイフを寸でのところで躱す。

「いいの~?顔向けできなかったら、俺が殺しに来るのも見えないよ?」

ナイフを投げた張本人、カルマが殺せんせーの方に歩きながら言い放つ。
カルマを止めようとして、俺はカルマが手にしているものに気づいた。
「カルマ君!先生は今落ち込んで・・・ん?ニュオ!!」
殺せんせーはカルマを怒ろうとして、カルマが教卓に放ったものを見て驚く。
それは、１００点や９９点と言った高得点が書かれたカルマのテストだった。
「俺問題変わっても関係ないし」
みんなも驚いて、教卓の前に集まっていく。
「すげぇ・・・」
「数学１００点かよ・・・」
「俺の成績に合わせてさ、アンタが余計な範囲まで教えたからだよ～。だから出題範囲が変更されても対処できた。だけど、俺はこのクラス出る気ないよ。前のクラス戻るより、暗殺の方が全然楽しいし。で、どーすんのそっちは?全員５０位以内に入んなかったって言い訳つけて、ここから尻尾巻いて逃げちゃうの?それって結局さ、殺されんのが怖いだけなんじゃないの～?」
(・・・いい話だったけど最後はやっぱり挑発で終わるのか、カルマ。けど・・・去ると宣言した殺せんせーを引き留めるにはこれが一番かもな)

みんなもその事に気づいたようで、お互い顔を見合わせ、

「な～んだ、殺せんせー怖かったのかぁ～」

「それなら正直に言えば良かったのにー」

「ねー怖いから逃げたいって」

みんな殺せんせーを挑発しだす。

殺せんせーの顔はみるみる赤く染まってゆき・・・

「ニュヤーッ!!逃げるわけではありません!!」

「へぇ～じゃあどうすんの？」

怒った殺せんせーにカルマが聞く。

「期末テストにあいつ等に倍返しでリベンジです!!」

みんながそれを聞いて、笑い出す。

それは、先生が結局E組から去らないという事を暗に示した事への安心感からも来ているのかもしれない。

俺は、教室の後ろからみんな様子を見て思った。

何がともあれ、この教室にいつもの活気が戻り、また楽しい生活に戻れることを俺は素直に喜んだ。

「そういえば、隼人も点数いいんじゃないの～？」

みんなの中心にいたカルマが唐突に振ってくる。

みんなも一斉に振り返り、興味を示す。

「え!?いや、俺はそんな・・・見せるような点数じゃ」

「え～見せろよ～!ほら、奪い取れ!」

岡島の扇動でみんなが俺のテストを覗こうと突っ込んでくる。
そのまま俺はもみくちゃにされて・・・テストを取られて・・・

「す、すげぇ・・・」

聞いたカルマを含め、全員が俺のテストの点数に驚くのだった。

「流石俺だな、お前のあのテストの点数は俺のおかげだろ?」

家で晩飯を食べ終え、リビングで寛いでいた俺に、同じく寛いでいた千賀が自慢げに言う。

「さあな。あと、お前が少し先の範囲まで教えてたのは知ってたからか?」

俺は千賀に尋ねる。

「いや、知らなかった。だが、割と最近、学校へ通勤してた時にすれ違った本校舎の生徒が一気にテストが難しくなったとか言ってたから、テスト難易度が上がったか問題範囲が変わったかのどっちかが行われたのだろうと思ってね」

「それで、最近お前の教える範囲が広い上にクソむずくなってた訳か」

「ああ、そうだ。俺の対策は完璧だったろ?」

「まあな。ありがとう」

俺は千賀に礼を言う。

「で、アンタの初のテストの点数は何点だったのよ？」

そう言って、イリーナ先生は俺のテストに手を伸ばし・・・絶句する。

「・・・イリーナ先生、俺元々Ｅ組じゃないです」

「ああ！そ、そうだったわね。ビックリだわ～もう」

取り繕うイリーナ先生の手には・・・

国語：１００点

数学：９９点

英語：１００点

社会：１００点

理科：９８点

そう書かれたテストがあった。

「にしても、アンタが理系科目を克服するなんてね。言語はまだ楽だけど、理系科目はそうはいかないんじゃないの？」

イリーナ先生が思って俺に聞く。

「まぁ、殺せんせーの教え方が良かったしな。おかげで理解が楽で、先の範囲も予習出来たのさ。ホント、殺せんせーは先生だよ」

俺は自分の先生である超生物に尊敬の念を持ったのだった。

「そういえば隼人、あのテスト校内2位だから給料ちょっと増やしてやるってボスが「ヒャッホゥー!最高だぜぇ!!」・・・」